

燈

光



11

「灯台絵画コンテスト 2023」入賞作品

● 国土交通大臣賞

(表紙)「見守る灯台」

平 晴海 さん

兵庫県神戸市立東町小学校 6年

評：圧倒的な光と影の力強さを感じられます。潮の香りまで漂ってくるようです。

● 海上保安庁長官賞



「夏の思い出の灯台」

青木 蒼空 さん

徳島県徳島市国府中学校 2年

評：ゴッホ的にタッチを統一して描きあげています。突出したアングルからも力を感じます。

● 燈光会会長賞



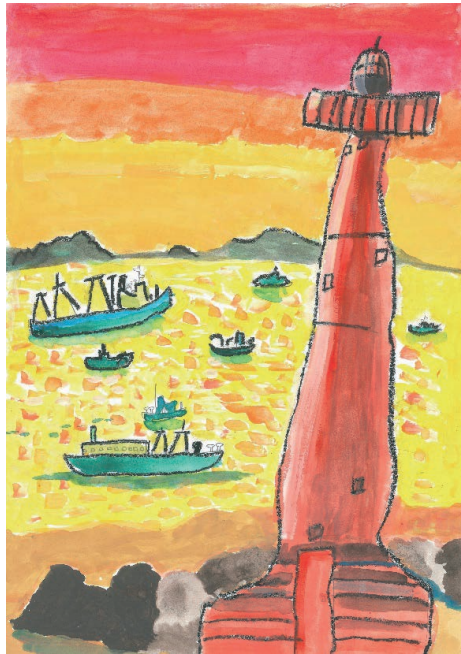
「ざんばみさきとうだいのゆうひをみたよ」

荻原 純永 さん

埼玉県ふじみ野市立駒西小学校 1年

評：小学校低学年らしからぬ描写タッチと色使いで幻想的な雰囲気
を表現しています。

● 金賞（小学生低学年の部）

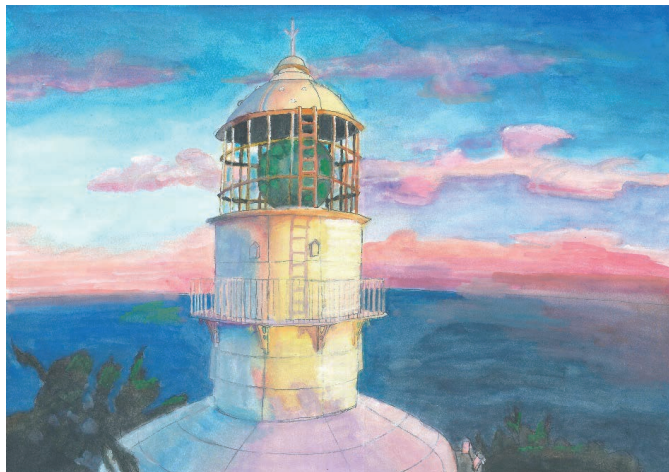


「夕陽にかがやく灯台」

田中 翔 さん

和歌山県和歌山市立吹上小学校 3年

●金 賞（小学生高学年の部）



「なないろに光る灯台」

楠本 ひかり さん

和歌山県御坊市立野口小学校 5年

●金 賞（中学生の部）



「夕暮れ前」

苅谷 杏奈 さん

福井県坂井市立丸岡中学校 3年

小学生低学年の部

● 銀 賞



「とうだいを まもるひとのえ」

武田 英吾 さん

長崎県対馬市立東小学校 1年

● 銅 賞

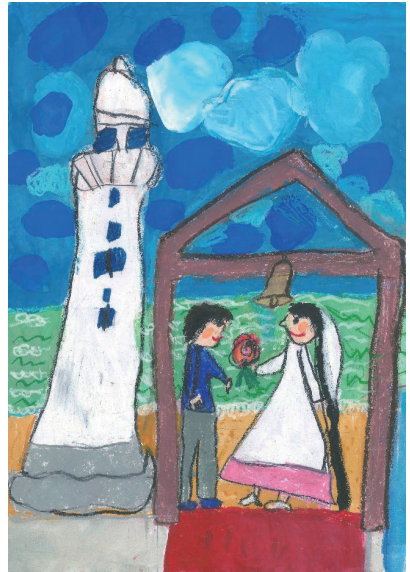


「夜空のシンフォニー」

山本 彩登 さん

愛知県名古屋市立上野小学校 1年

● 銀 賞



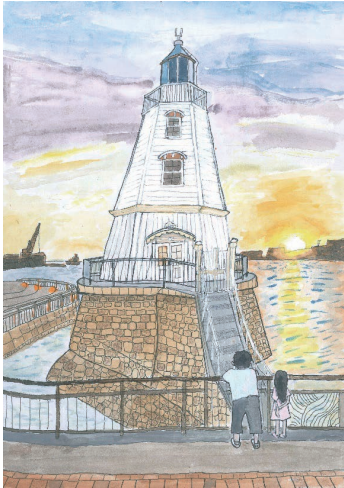
「野間のとうだいでハッピーウエディング」

横田 鈴乃 さん

愛知県美浜町立布土小学校 1年

小学生低学年の部

●銅賞

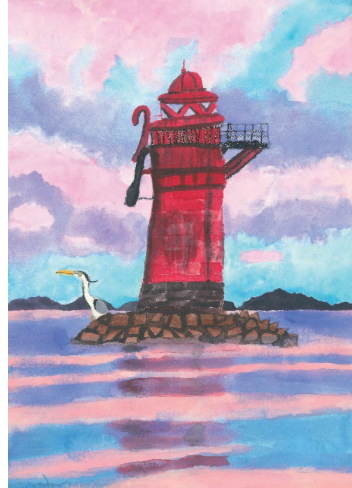


「きれいやなあ」お父さんと見た旧堺灯台」

田中 萌々果 さん

大阪府堺市立家原寺小学校 2年

●銅賞



「あかとうだいさん またあそびにくるね」

瀧田 百莉 さん

愛媛県新居浜市立大生院小学校 1年

●銅賞



「灯台さん ありがとう～さたまさき灯台～」

中友 稜 さん

鹿児島県鹿児島市立伊敷小学校 2年

●銅賞



「灯台と踊っている私」

三浦 望 さん

千葉県銚子市立双葉小学校 1年

小学生高学年の部

●銀賞



「都井岬灯台」

栗原 夢希 さん

和歌山県日高川町立和佐小学校 5年

●銅賞



「岩場の先に鼠ヶ関灯台」

梅津 ありさ さん

山形県酒田市立亀ヶ崎小学校 6年

●銀賞



「灯台でさぼてんに出会った」

青木 勇麻 さん

徳島県徳島市国府小学校 5年

小学生高学年の部

●銅賞



「私の宝物」

谷脇 翠 さん

和歌山県和歌山市立伏虎義務教育学校 6年

●銅賞



「友ヶ島灯台」

佐々木 新之助 さん

和歌山県日高川町立中津小学校 5年

●銅賞



「海を見守る佐多岬灯台」

中野 心百合 さん

鹿児島県鹿児島市立伊敷小学校 5年

●銅賞



「夜の灯台」

宮内 響子 さん

千葉県銚子市立双葉小学校 5年

中学生の部

●銅賞



「朝日に輝く灯台」

前田 みぞれ さん

沖縄県宮古島市立城東中学校 3年

●銀賞



「日の出前の室戸岬灯台」

兵頭 柚 さん

愛媛県宇和島市立三間中学校 3年

●銀賞



「葛登支岬灯台の夕暮れ」

三原 菜結 さん

和歌山県立日高高等学校附属中学校 3年

中学生の部

●銅賞



「不思議なソテツと灯台」
野崎 健太 さん
鹿児島県霧島市立舞鶴中学校 1年

●銅賞



「潮岬灯台」
中田 衣純 さん
和歌山県田辺市立東陽中学校 3年

●銅賞



「星とともに」
蓮野 愛瑠 さん
富山県富山市立大泉中学校 1年

●銅賞



「本土最南端の灯台」
木屋尾 珠来 さん
鹿児島県薩摩川内市立川内中央中学校 2年

「夏休み企画」

「かつおのぼり掲揚」&「とよまの灯台星空観望会」

福島海上保安部・とよまの灯台俱樂部

福島県いわき市のシンボルとして地域に親しまれる「塩屋埼灯台」では、年間を通して細く長くをモットーに地元有志団体「とよまの灯台俱樂部」がカツオ（活動）しています。

まずは、夏休み企画第一弾！塩屋埼灯台に、かつおのぼり〴〵を掲揚すること今年で3年目、コロナ禍の影響を受けて来台者が激減していたことから、令和3年の海の日に始めたものですが、そろそろ定例的な行事として地元にも認知され始めました。昨年ひっそり追



写真1 どんより…“かつおのぼり”



写真2 天気が悪いのは私のせいです（泣）

加した、うなぎのぼり〴〵も風景となり、今年も天候に恵まれることを祈り、当日を迎えたところです。実は「とよまの灯台俱樂部」代表は、「企画したいイベント開催率50%」（言い方変えれば中止率50%!!）という天気にも恵まれない〴〵もっている人〴〵でございます。そして、何とか掲揚できた昼前の状況を写真でご覧ください！

かつおのぼりを掲揚している後ろ姿の写真的の方が〴〵もっている人〴〵「とよまの灯台俱樂部」代表です。ちなみにですが、シ

ヤツは福島県いわき市役所公認の「いわきアロハシャツ」です。保安部の職員も出勤する際に愛用しています。

塩屋埼灯台の参観時間は、午前9時～午後4時30分となっていましたので、最初のお客様が見える前に掲揚したかったものの、強風と大雨に見舞われたため様子を見て、雲が去った午前10時過ぎにようやく掲揚できました。

梅雨時期ということで初日こそ諦めていましたが、16日(日)、「海の日」17日(月)は天候に恵まれ(とよまの灯台倶楽部代表の何かを吹き飛ばし)、白亜の灯台と空の青さとのコントラストが素晴らしいものとなり、来台される方は特別感のある「かつおのぼり」の写真を熱心に撮られたり、灯台に登る途中の窓から見える「かつお」と「うなぎ」の迫力ある写真を撮られたりと、「風に乘って、灯台の空にかつおたちが舞い上がる！」良かった良かった。

今年は例年の「かつおのぼり掲揚」



写真3 ミニコンサート



写真4 演奏

に追加して、ミニコンサートを開催することができました。これは「ZERO SAPHONE ENSEMBLE」からの灯台でコンサートを行っていただけというありがたいお申し出を実現させたものですが、当日は気温が33度を超える猛暑となり、体力的にも苦労されたようでした。

演奏は、午後1時、3時の2回。灯台参観者の皆様も足を止めて、その音色に耳を傾けられ大盛況のうち

に幕を閉じました。

「ZERO SAXOPHONE ENSEMBLE」の皆様、大変ありがとうございました。

ちなみに、なぜ「かつおのぼり」なの？そして、うなぎのぼり？ご存じの方もいらっしやるかと思いますが、ご説明いたしましょう。少し真面目なお話です。

江戸時代頃から、いわき沿岸はカツオ漁が盛んで、水揚げされたカツオは鰹節に加工され昭和50年代各地に出荷されていきました。地元の四倉諏訪神社には「改良鰹節之碑」が建立、安置されています。また、初ガツオが水揚げされると沼ノ内弁財天へと奉納する習わしがあり、明治時代には常磐の金毘羅神社にも大漁に感謝する漁師によってカツオが奉納されていきました。いわきの海の玄関口、小名浜港にいち早く夏の訪れを告げる初ガツオの水揚げは、市民の人気の的であり、色々な味わい方で楽しまれています。

この「いわきⅡかつお」から、四倉諏訪神社では、毎年4月1日から5月中旬の間「かつおのぼり」を掲揚しており、カツオに支えられ先人が活躍した時代に思いを馳せ、まちの多幸繁栄を願う、海と共生する「いわき」ならではの光景であり、震災後は地域の早い復

旧、復興を願い、人々の士気を鼓舞する意味も込められ、力強くまっすぐ泳ぐ姿は、灯台が鋭く放つ光の筋（光芒）とも重なるものがあるように感じているものです。

そのような「かつお」を塩屋埼灯台へ掲げる願いは、ストレスがたまる世の中、海のまちへ出かけて潮風を浴び、波と戯れ、灯台からエネルギーを貰い、リフレッシュして欲しい。浜の風景に「かつおのぼり」が泳ぐことで、夏の到来や自然の力強さを感じ取り、心の癒しに繋げて欲しいというものです。

最後に「うなぎのぼり」の出生地、沼ノ内弁財天「賢沼ウナギ生息地」は国指定の天然記念物で、賢沼では殺生が禁じられており、大ウナギとなって生息しています。身近な社会情勢も、争いや犠牲にあふれて落ち着かないところですが、「殺生禁止」のウナギが、日常生活の平和・平穏に繋がって欲しいと願い、掲揚しています。運氣上昇の「うなぎのぼり」であって欲しいという願いもあります。

ちなみに、わら焼きにした「かつおのたたき」を荒塩で食らうことが好きな筆者です。

また来年もよろしくお願います!!
ちなみに、私は嘘をついてはいけないので訂正しま

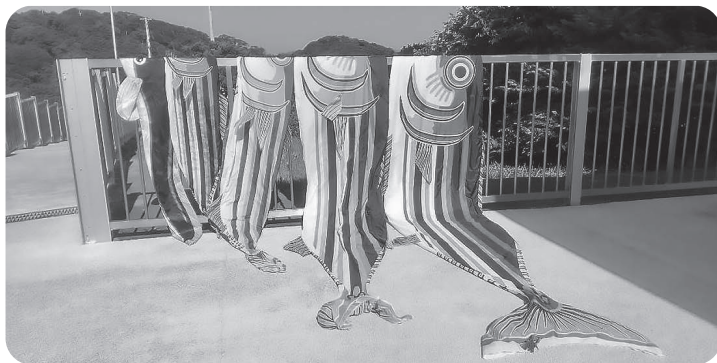


写真5 “今年もイイ泳ぎだったでしょ”と片付け前に日干しされるカツオとウナギ



写真6 結果的に“イイ風”のおかげで映えました

すが、

「いわきアロハシャツは、保安部の職員も出勤で着用しています。」

↓そんなことはありません。当部は部長だけです(多分)。いわき市に本社がある衣料品メーカーの商品で、毎年デザインが少しずつ変わります。通な方は毎年購入されているようです。ちなみに部長は、サイズ感を確かめるため、まずはお試しの2022年セールの品を購入しようと探されたようですが、残念ながら欲しいサイズが無く、渋々(想像)2023年定価で購入されたそうです。

さて、夏休み企画第二弾!塩屋埼灯台で星空をみようというものです。

昨年度も実施を試みたものの、コロナ禍という状況から見送った経緯もありましたので、今年は何の状態も星を眺めるには良さそうな8月11日(金)に実施を決定し、事前の申し込みを行ったところあつという間に満員御礼となりました。

―夜間の公開となりますと、灯台に登る登

山道（標高40メートルほどの険しい山道です。）に灯りがありませんで、参加者をより安全に上り下りさせるための対策を事前に検討し、灯台敷地内でも行動してもよい範囲を決めて、人の配置の工夫や照明を追加して誘導することとしました。

先にイベントを無事に終えることができたことに触れさせていただきますと、夜間という状況下、このイベントを無事に終えることが出来たのは、主催者側として当日の安全管理を行った灯台倶楽部会員の協力と、公益社団法人燈光会からご支援をいただきながら、必要な措置を行えたということが大きかったと思います。

さて、夏休み企画第一弾でも「力」を發揮していた、例のあの方が、ここでも、「力」を發揮いたしました、まさかの台風第7号接近。。。(えっ!?!うそでしょ?) (ここまできたら奇跡というしかありません) (この時期に台風が接近することは経験から少ない(地元の方々)(長い付き合いなので、こうなることは私は知ってましたよ)…)などなど、多方面から

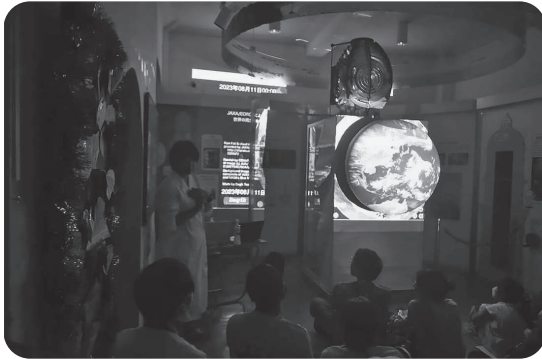


写真7 ダジック・アース (デジタル4次元地球儀)



写真8 曇りで湿度が高く光芒が美しく見えました…
星空の代わりに…

囁きが聞かれておりましたところ、結果的に台風第7号の直撃とはなりませんでしたが、影響を受けた太平洋沿岸は曇り後に雨(雷雨)となり、星を見ることは叶いませんでした。しかしながら、このような天候不順で催行が難しい場合も想定済み。私たちは星が見えなくても参加者が満足していただけるよう、切り札として、魅力的な講話と資料を準備していただいております。それが、この写真にある「ダジック・アース(デジタル

4次元地球儀」です。

ダジック・アースとは球体に地球や宇宙空間などを投影し、そこに小さな宇宙（小宇宙）「コスモ」ではありませんよ。若しくは宇宙から眺めている景色を立体的に再現できるシステムで、京都大学を中心に開発されたものです。このダジック・アースは、科学的や教育目的であれば無償で利用することが出来ることとなっております、今回は、とよまの灯台倶楽部会員の「国際天文学連合の広報・PR部門に所属する「先生」から、「星空と月と海」を題材に、ダジック・アースを用いて、星座や三大流星群の一つ「ペルセウス座流星群」が8月13日（日）に極大を迎える際の見つける方法等、大人から子供まで興味津々な講話を行いました。

珍しいロケーションでの講話や塩屋埼灯台の点灯状況、光芒の美しさ、そして灯台資料館に展示している資料を基にした説明により、塩屋埼灯台を活かした様々な魅力に触れていただき、参加者からは満足であったとの感想があったところですが、曇り空で星がほとんど見えなかったことは本当に残念でした。

でも、またいつか夜空を見上げた時に、本日のイベントで知ったことを思い出して、参加して良かったな

と思つて欲しいですね。

さて、塩屋埼灯台は、今年「燈の守り人プロジェクト」の擬人化となりキャラクターが製作されました。今後、新たな魅力発信の一つとして活かしていければと思つていきます。

△とよまの灯台倶楽部▽

灯台を愛好する市民と、関係する団体が団結し、いわきのシンボル塩屋埼灯台を活かした魅力発信と美化活動などを行う団体です。

写真9 今回、灯台倶楽部が作成したフライヤー

白洲灯台フェス in 博物館 (イベント部門、切手販売)

若松海上保安部

本誌5月号及び9月号でご紹介しました、白洲灯台フェス in 博物館ですが、今回は7月30日(日)に実施した1日限りのイベントと白洲灯台150周年記念切手の販売についてご紹介いたします。

【リーフレット】

リーフレットは大きく出ました。
「北九州の近代化は灯台から始まった」と銘打って、キャッチフレーズとしています。



写真1 リーフレット表



写真2 リーフレット裏

幕末に英仏両国と江戸幕府が結んだ大阪約定で、隣の六連島灯台や部埼灯台が建設され、これらの灯台と略同時期に明治政府によって建設された白洲灯台も海上交通の要所である関門海峡入口の安全を守ることと近代化を支えたものと考えられます。そこでこのキャッチフレーズを使用することとしました。

現在の2代目白洲灯台は官営八幡製鉄所の最初の高炉に火がともされるちょうど一年前に鉄と石造りで立て直されたもので、その歴史はまさしく日本の近代化と同様に後世へ引き継ぐべきものと思われれます。

【タイムスケジュール】

イベント当日のタイムスケジュールは次のとおりでしたが、夏休み期間ということもあり、県内外から多くの方々が来場さ

れており、やっとの思いで人の整理をしつつ進めておりました。

10…00～11…00 展示解説会（展示物の説明）

元灯台守のお話（日本最後の有人灯台、女島灯台滞在）

12…20～ ミニ灯台製作

（ペットボトルとLED電球を使った夏休み宿題向け工作教室）

13…00～ 灯台俳句コンテスト表彰式

（小中高生へ灯台に関する俳句を事前に募集）

13…30～ ミニ灯台製作（2回目）

14…30～15…30 展示解説会（2回目）

元灯台守のお話（2回目）

【タイムスケジュール毎のイベント内容】

○展示解説会

博物館側学芸員が担当するのは「岩松助左衛門と白洲灯台」展示についての説明です。助左衛門の崇高な思いや灯台建設までの苦労など、丁寧な説明がなされており、皆さん、大きく頷きながら説明に耳を傾けていました。当庁側は交通担当次長が「航路標識の変遷」



写真3 学芸員による解説



写真4 交通担当次長による解説

について、実物の機器などを指し示しながら解説を行いました。大変わかりやすい説明で、航路標識の知識のない市民の方にも理解してもらえたようでした。

○元灯台守のお話

第七管区海上保安本部の海上保安マイスターで元灯台守の前畑正信さんと、博物館歴史課長の日比野利信先生による問答式のお話が行われました。前畑さんは日本最後の有人灯台であった「女島灯台」最後の滞在を経験された海保OBでいらっしゃいます。入庁後、



写真5 草垣島や女島灯台の写真をスライドで紹介しながらのお話会



写真6 守燈精神を熱く語る前畑さん



写真7 話が白熱し長引いたため、終了時間を表示

「過酷な滞在であった草垣島灯台を皮切りに退職まで、主に航路標識保守業務を全うされました。今回のお話会ではメインとして草垣島や女島での滞在について、日比野先生の質問に答える形で、聴講に訪れた方々にわかりやすく、ときにはジョークを交えながら話をされており、大きな笑い声なども聞こえてくるなど、終始和やかなお話会となっております。

前畑さんが最後に強くおっしゃっていたのは、

「実生活の中で電気が通っていないことや水が蛇口から出てくることを当たり前と思わないでください。そのために見えないところで保守管理をしている人たちがたくさんいます。私たち灯台守も同じ思いで仕事をしています。火をともしことで航行船舶に安心を与え、安全な航海を支える仕事だという責任感で、無人島でも頑張ったのです。皆さん、そういった方々に感謝して生活していきましょう。」

という守燈精神についてであり、現代でも様々なインフラ保守などで通用する心構えです。

○ミニ灯台製作

小学生以下を対象にペットボトルを活用したミニ灯台製作を行いました。子供たちが体験するというこ



写真8 ごった返す工作室の様子



写真9 圧着端子作業にてんてこ舞いの様子



写真10、11、12 できあがったミニ灯台を点灯し喜ぶ子供たち

で、30分を目途に完成させるとなると、ある程度の下準備が必要でした。LEDランプや電池ボックスも入手し、事前準備万端で臨んだのですが…。色んなハブニングが待ち構えていました。

受付は先着順でしたが、開始前から長蛇の列となり、全員が製作できないということ、家族で1つ製作していたとくこととしました。皆さん、夏休みの工作の宿題にするかと張り切っていました。

電池ボックスやLED電球の不良などもあり、また完成直前に電池ボックスを圧着端子で結合する作業に手間取るなど、バタバタした状況でしたが、元灯台守の前畑さんのサポートを受け、併せてジョークもお上手なこと、子供たちは出来上がりを楽しみに目を輝かせて待っていました。LEDが無事に点灯すると、「わあ〜」という喜びの声も聞かれ、楽しく製作をしつつ、達成感を味わったようでした。

○俳句コンテスト表彰式

当部では本イベントに先立ち、4月1日〜6月30日の間、灯台に関する俳句コンテストを募集しました。対象は小中高生でしたが、応募総数405作品が集まり、その中から小中高各1名に若松海上保安部長賞を



写真13 高校生の部 表彰の様子



写真14 北九州市港湾空港局キャラクター「スナQ」もお祝いに…



写真15 小中高各受賞者



写真16 海上保安友の会の方々と記念撮影



写真17 市立洞北中学校校長先生



写真18 市立向洋中学校教頭先生



写真19 学校賞盾など

贈呈しました。

優秀作品の選出に当たっては、博物館有識者に選者となっていたいただきました。

保安部長賞以外に、入選5作品及び多くの作品を投稿してくださった中学校2校へは学校賞をそれぞれ後日、部長が直接各校へ訪問し、各賞を贈呈しました。

このうち北九州市立洞北中学校の校長先生はインスタグラムで、校長日記として学校賞表彰を投稿されており、早速、多数の「いいね！」が付されていたようです。また、同立向洋中学校では表彰盾や副賞を来客者が見えるところへ展示し、改めて北九州の偉人であ



写真20 参加賞 (応募者全員分)

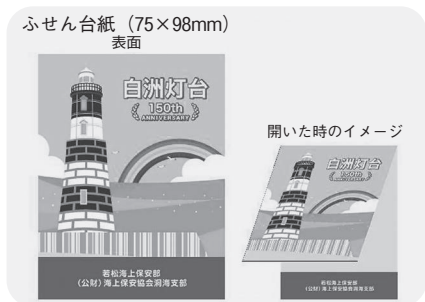


写真21 カットバン&付箋台紙

る助左衛門についての勉強をし直しましたとの話をされておりました。

※俳句コンテスト部長賞受賞作品

小学生の部

だいすきな とうだいたちと まんげつは

中学生の部

夏空に 白黒映える 灯台や

中学生の部

凍てる海 照らす光の 暖かさ

また応募者全員には海難防止のウエットティッシュなどと白洲灯台150周年記念シート(カットバン入り)を手作りで袋詰めし、プレゼントしました。この台紙は、イベント来場者へも付箋入りとしてお渡ししました。ちなみに付箋は北九州市からのカンパにより準備しましたが、様々な色や大きさを組み合わせ付箋台紙にセットする作業がとても大変な作業でした。

【白洲灯台お菓子の販売】

福岡県立折尾高校生活デザイン科の食物コースの生徒の皆さんが知恵を絞って企画・製作し、イベント日に博物館で販売してくださいました。折尾高校との関



写真22 販売の様子



写真23 若松部長から感謝盾授与



写真24 生徒の皆さんと担当の先生方



写真25 若松部長ほかと記念撮影



写真26 白洲灯台パウンドケーキ(美味でした!)

係は、昨年、若松保安部で実施した灯台フォトコンテストで同校生徒さんが保安部長賞を受賞された関係で、その後も地域連携として関係が継続しておりました。お菓子販売については、同校広報担当の生徒さんたちがインスタグラムやユーチューブにアップし、事前に紹介されていました。

白洲灯台をイメージしたパウンドケーキは、午前午後にわたり販売したところ、早々に目標の100個が完売、せっかく買いに来場した方々全員に行き届かないほどの人気ぶりでした。生徒さんたちは企画・製作・販促活動・販売まで一連の作業を経験しながら、試行錯誤して考え、実行されたとのことで、先生方も「たいへんよい経験ができました。素晴らしい企画をご提案いただき、ありがとうございました。」とおっしゃ

っていました。

最後に今回のイベントは内容が多岐であったため、北九州市文化財係、博物館、港湾空港局、高中小学校の他、海保マイスター、ボランティアなど、多くの方々との事前調整に長い期間を要しましたが、どの会場も予想した以上に大盛況で、当日の来館者は3430人とのことであり、海保の知名度向上につながる好イベントとなったものと思われます。

このイベント後も企画展示は9月3日まで続きましたが、7月1日からの企画展示期間中、博物館への来館者は延べ104,539人と多くの方々に灯台の意義や役割などについて認識していただく良い機会となりました。

【白洲灯台150周年記念切手の発売】

9月1日には白洲灯台150周年記念切手の販売が開始されました。これに先立ち、8月29日(火)に助左衛門ゆかりの小倉城松の丸において、同記念切手の贈呈式が行われ、来賓の北九州市職員や岩松助左衛門翁顕彰会の皆様が見守る中、日本郵便(株)九州支社代表の北九州統括郵便局長から若松保安部長へできたての記念切手が手渡されました。



写真27 記念切手デザイン



写真28 記念切手受領



写真29 うみまる返礼



写真30 岩松翁記念塔をバックに記念撮影

【白洲灯台周遊クルージング】

今後の予定としましては、10月1日に港湾空港局が企画した白洲灯台見物ツアーなども予定されています。このクルージングは市内小中学生から公募し、洞海湾から響灘を周遊しながら、近代化の歴史や白洲灯台の意義などについて解説を交えて実施するもので、若松海上保安部交通課としては白洲灯台についての解説を行うガイドを依頼されています。

また船内でクイズ大会なども予定されており、灯台にまつわるクイズなども準備しています。

【終わりに】

この度のイベントについては、多くの関係先機関などにご協力をいただき、精いっぱいのことを実施することができました。皆様のおかげだとつくづく思っております。昨年度の小倉城でのイベント以上に大きく盛り上がった白洲灯台フェスティバルについてのご紹介はここで終了させていただきます。(現在、白洲灯台模型やパネルは戸畑図書館で展示さ

れています。)

※北九州市立自然史・歴史博物館歴史課長の日比野利信先生及び同学芸員の守友隆先生からご寄稿いただきました記事「岩松助左衛門と白洲灯台(この資料は企画展示期間中、来場者へ配布されたものです)」を添付します。灯台のことも深く理解していただき、この度の企画展示やイベントに最も貢献して下さったことについて、この場を借りて深く御礼申し上げます。



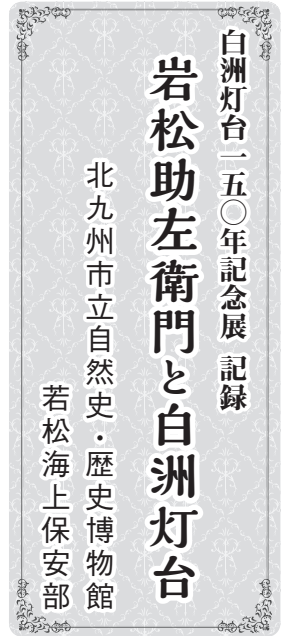
写真31 クルージング
チラシ (表)



写真32 クルージング
チラシ (裏)



写真33 展示室を紹介する日比野利信先生



1 企画展の概要

名称 白洲灯台150周年岩松助左衛門と白洲灯台
主催 北九州市立自然史・歴史博物館
若松海上保安部
会場 北九州市立自然史・歴史博物館
ほけつとミュージアム No.9・10
会期 令和五年七月一日(土)～九月三日(日)
趣旨 小倉北区藍島の南西の岩礁に建てられた白洲灯台が明治六年(一八七三)に点灯を開始して一五〇年を迎えます。白洲灯台は長浜浦庄屋の岩松助左衛門が建設を発意し、小倉藩・長州藩・日田県から三度にわたって許可を得て、私財をなげうち奔走しました。実現には至りませんでした。その志は明治政府に引

2 企画展の内容

き継がれ、灯台は完成しました。本展では、岩松助左衛門が貫いた志と活動、さらにそれを継承し、事績を顕彰してきた人びとの活動について紹介して、同灯台の歴史的意義を明らかにします。合わせて、白洲灯台と同時期に建設された関門海峡周辺の灯台とその役割について紹介します。

構成 ①航路としての小倉・若松沖と関門海峡

②志を貫く―岩松助左衛門の活動―

③助左衛門の志を受け継ぐ・伝える

④関門海峡周辺の灯台と役割

展示品 岩松家資料(北九州市立自然史・歴史博物館所蔵)や灯台関連の器具(海上保安庁提供)

など六五点

備考 展示解説シート(後掲、ただし出品一覧は省略)を展示会場で配布

3 関連イベント

名称 白洲灯台フェス in 博物館

主催 若松海上保安部、北九州市

日時 令和五年七月三十日(日) 10時～15時
場所 北九州市立自然史・歴史博物館 3階

内容

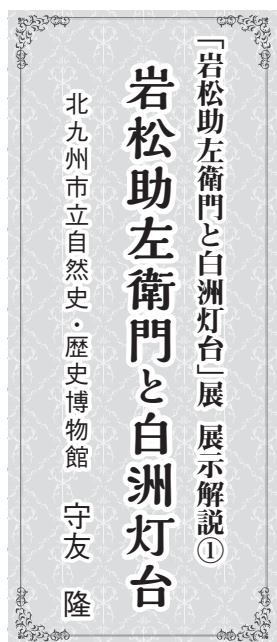
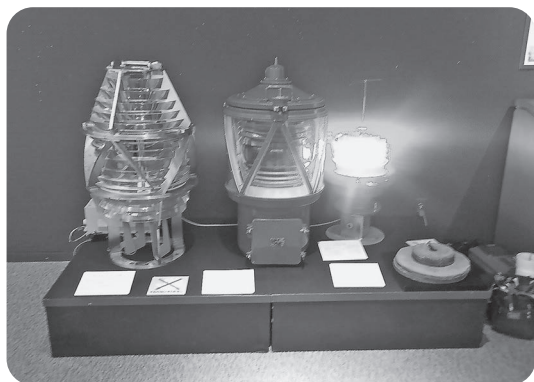
企画展会場・講座室・実習室

① 展示解説＋最後の灯台守インタビュー
担当者によるギャラリートーク

前畑正信氏へのインタビュー

② ワークショップ「ミニ灯台を作ろう」

③ 灯台俳句コンテスト表彰式



1 航路としての小倉・若松沖と関門海峡

現在の響灘・関門海峡は、古代から多くの船舶が往来しました。また、瀬や暗礁が多いことから海難事故も多く発生したようです。

その一例を挙げると、天正二十年（一五九二）七月二十二日、肥前名護屋城（現佐賀県唐津市）にいた豊臣秀吉は、母の大政所が重病との知らせを受け、名護屋を発つて大坂に向かいました。その途中、内裏沖（現門司区大里）で秀吉の御座船が浅瀬に乗り上げ、秀吉は毛利秀元の橋船に救助されましたが、御座船の船頭石井（明石）与次兵衛は責任を取って切腹したといわれます。江戸時代、秀吉が遭難した浅瀬は「与次兵衛が瀬」と呼ばれ、瀬の上に石碑が建てられました。

江戸時代、響灘・関門海峡は、長崎などの九州の港

と大坂などの瀬戸内海の港を結ぶ航路、北国・日本海地方と大坂などを結ぶ西廻り航路などがあり、筑前五ヶ浦（能古島・浜崎・今津・宮浦・唐泊）廻船・東海船（渡海船）・北前船などが往来しました。小倉藩や福岡藩など諸藩の年貢米、諸国の産物などが運ばれ、九州と中国地方・上方を往来する人々もこの航路を通る船を利用しました。

岩松助左衛門の記録によると、企救郡藍島（現小倉北区）沖白洲近辺は水深が浅く、筑前国若松（現若松区）沿海には四か所の浅瀬がありました。そのため白洲は「西国第一之難所」で、かつ目印の灯明台がないため、遭難する船が後を絶たなかったそうです。

2 岩松助左衛門の灯台建設の志①

岩松助左衛門（一八〇四〜七二）は、小倉藩小笠原家領である豊前国企救郡長浜浦（現小倉北区長浜）で生まれました。諱（実名）は富保。岩松（井和松）氏は百済王族の末裔との説があり、助左衛門も本姓を百済と名乗っています。先祖は肥前国伊島（現長崎県佐世保市）の漁人で、企救郡高浜（現小倉北区）に移住したと伝わります。ちなみに、元々の名字は井和松でしたが、明治元年（一八六八）、助左衛門が山口（長州）

藩に白洲灯台建設の願書を差し出す際、岩松と改名しており、以下、岩松で表記を統一します。

文政四年（一八二二）、助左衛門は長浜浦の庄屋となり、文久元年（一八六一）十二月まで務めました。

同月、海上御用掛・難破船支配役に任命されました。

文久二年四月五日、助左衛門は大庄屋を介して小倉藩庁に白洲灯籠台築立願書を提出し、同二十五日に許可されました。ここで重要なのは、藩は建設を認めただけで、周辺住民の賛同を得ること、資金の確保、施工などは全て助左衛門が独力で行う必要があった点です。

そのため助左衛門は、建設資金確保のため私財をなげうつとともに、賛同者からの寄付を募ることにしました。ところが翌三年五月、長州藩が馬関（関門）海峡で外国船を砲撃するなど世情が不安定となり、助左衛門の活動は容易に進展しませんでした。さらに慶応元年（一八六五）十月十四日、妻のとみが亡くなったことは助左衛門にとって大きな痛手でした。同二年六月には小倉藩兵を中心とする幕府軍と長州軍の戦いが始まり、企救郡（現門司区、小倉北・南区）は戦場となり、灯台建設を進めることはできませんでした。

3 岩松助左衛門の灯台建設の志②

慶応三年（一八六七）一月、小倉藩と長州藩の講和が成立し、企救郡は長州藩の「預り」となり、同藩が実効的支配をしました。そのため明治元年（一八六八）十一月、助左衛門は山口（長州）藩の大庄屋に灯台建設願を提出し、翌二年一月、山口藩庁は建設を認め、米一五〇石を建設資金として与えることになりました。

ところが米の売却代金は助左衛門の手には渡りませんでした。加えて、藍島・長浜浦・平松浦（現小倉北区）、彦島の福浦（現下関市）の人々が灯台建設に反対を始めました。白洲近辺で海難事故が起こると、各浦々は救助船を出さねばなりません、日当が貰え、かつ難破船の積荷・船具などの漂流物を各浦が拾得することができたからです。福浦は灯台が完成すると滞船が減るため反対しました。

明治二年十一月十七日、企救郡新道寺村（現小倉南区）から起こった百姓一揆は企救郡一帯に広がりました。この一揆の影響もあり、助左衛門の活動も小休止になったようです。

さらに明治三年二月、企救郡は山口（旧長州）藩「預

り」を離れ、明治政府直轄の日田県管轄となりました。三月、助左衛門は日田県に灯台建設許可を願い出、同四日建設が許可され、助左衛門は灯台の基礎工事を開始しました。この工事は七月に完成し、費用三五五両は寄付によって集まったものでしたが、その他の費用工面のため助左衛門は借金をしており、助左衛門の私財はほとんどなくなっていました。

4 岩松助左衛門の灯台建設の志③

明治四年（一八七一）三月二十四日、白洲灯台建設について助左衛門に尋ねたいことがあるので、企救郡会所に出頭するようにとの連絡がありました。これは東京の政府に、助左衛門が灯台建設のため奔走していることが伝わったためでした。

翌月五日、助左衛門は日田県小倉出張所に、灯台建設を思い立ってから現在までの経緯と今後の見込みを書面にして提出し、それは県を通して東京に送られました。同二十四日、日田県小倉出張大参事白浜勘兵衛（貫札）が白洲を視察しました。助左衛門は作成した白洲の図面を見せながら説明し、「永く辛苦致候もの」と労いの言葉をかけられ、建設関係の絵図面・書類を提出するよう命じられました。

同年六月、政府は灯台の私設とそのため募金を禁止しました。助左衛門が始めた灯台建設の事業は政府の事業として引き継がれる方向性が定まったのです。八月二十四日、助左衛門は「疝氣」（腰腹部の疼痛）のため歩行困難となり、病床に臥すようになりました。

同年九月九日、工部省灯台寮の役人が白洲を見分することに、病身を押して助左衛門は白洲に同行・案内し、灯台寮重役は「神妙奇特之至」と称賛したそうです。十月七日、政府に提出する文書を六連島（現下関市）の灯台寮出張所に提出し、同月、白洲灯台は灯台寮の予算で建設されることが決定しました。

5 受け継がれる助左衛門の志

明治四年（一八七二）十一月十四日、豊津県・千束県・中津県が合併して小倉県となり、企救郡は小倉県に編入されました。同二十一日、六連島（現下関市）の灯台が点灯を開始しました。翌五年一月二十二日、門司の部埼灯台（現門司区）が点灯を開始しました。

同年三月一日、白洲灯台建設のため、灯台寮藍島出張所が設けられ、翌二日に岩松助左衛門の子栄吉が灯台建築御用掛に任命され勤務を始めました。これは灯台寮権大属の中沢孝政のはからいによるものでした。

中沢は、助左衛門の身元・人柄を小倉県に照会し、問題がないとの回答を得た上で、当時二十九歳の栄吉が「壯堅」・「正路之者」・「随分御用ニ相立候者」という評価から任用したのでした。助左衛門は栄吉が採用されたことを大変喜んだそうです。

三月二十九日、助左衛門が白洲に建設した会所の建物と外回りの石垣を、政府は六一円（両）で買い上げました。助左衛門は白洲灯台建設を進めるため巨額の借金をしており、その窮状を少しでも救うためだったようです。

明治五年四月二十五日、助左衛門は白洲灯台の完成を見届けることなく亡くなりました。菩提寺の西顕寺（現小倉北区）に葬られ、現在墓碑は本堂前にあります。翌明治六年九月六日、白洲灯台は完成しました。これは初代灯台で、同三十三年に二代目の現灯台が完成しました。

6 伝えられる助左衛門の志

明治四十四年（一九一一）五月、岩松助左衛門の孫である岩松徳太郎によって「白洲灯台創立者故岩松助左衛門事蹟」が編纂されました。この時期に編纂された理由は定かではありませんが、国・福岡県・小倉市

からの指示によるものだったのかもしれない。

大正十年（一九二一）六月、福岡県教育会小倉支会から『岩松助左衛門翁伝』が刊行されました。同年は助左衛門五十回忌にあたり、五十年祭典が挙行され、犬養毅（のち首相）が「光照千里 名留百年」と揮毫し、助左衛門の功績を称えました。

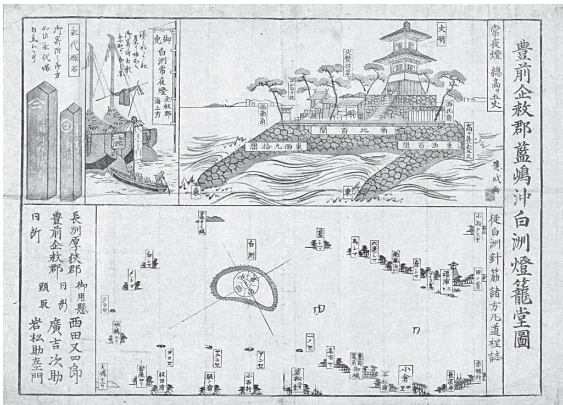
昭和六年（一九三一）七月発行の文部省国定教科書『尋常小学読本』巻十二に「白洲の灯台」が、同十三年八月発行『小学国語読本』巻十二に「白洲灯台」が掲載されるなど、助左衛門の志は全国に知られることとなりました。また同五年六月、福岡県教育会小倉支会は「岩松助左衛門翁銅像建設趣意書」を作成しました。

昭和三十六年（一九六一）三月、助左衛門は従五位を追贈されました。同三十八年、小倉城松の丸跡に、助左衛門が建設計画した和風の灯台を再現した白洲灯台岩松翁記念塔が建てられました。平成十二年（二〇〇〇）四月、記念塔の側に



展示風景

【画像】「豊前企救郡藍嶋沖白洲燈籠堂圖」
（北九州市立自然史・歴史博物館蔵）



慶応3年（1867）～明治2年（1869）頃に作成された、白洲に常夜燈を建設する計画を伝え、寄付を募る引札（チラシ）です。

「あ、白洲灯台 岩松助左衛門翁顕彰碑」が建立され、毎年四月に顕彰祭が開催されています。同二十五年（二〇一三）十一月、劇団青春座が「白洲灯台」を上演するなど、今日まで助左衛門の志は脈々と伝えられています。

※本稿は企画展解説パネル・解説シートの文章を一部修正したものです。

「岩松助左衛門と白洲灯台」展 展示解説②

関門海峡周辺の灯台と役割

北九州市立自然史・歴史博物館 日比野 利信

若松海上保安部交通課

1 明治前期における洋式灯台の建設

元治元年（一八六四）に長州藩は英仏蘭米の四国連合艦隊に敗れて多額の賠償金を支払うことになりました。全国政権として肩代わりした幕府は、慶応二年（一八六六）に賠償金の減免と引き換えに江戸条約（改税約書）を締結し、観音崎・釧崎（神奈川県）、野島崎（千葉県）、神子元島（静岡県）、檜野崎・潮岬（和歌山県）、佐多岬（鹿児島県）、伊王島（長崎県）八灯台と、横浜本牧、函館の二灯船が設置されることになりました。翌三年には英仏両国が兵庫港の早期開港を迫って幕府と結んだ大阪約定（大阪条約）に基づいて、航海の安全確保のため、江崎（兵庫県）、六連島（山口県）、部埼（福岡県）、友ヶ島（和歌山県）、和田岬（兵庫県）5灯台が追加されました。

灯台の建設は明治新政府に引き継がれることになり、明治元年（一八六八）九月十七日（現在の暦で十一月一日＝灯台記念日）に着工、明治二年（一八六九）一月一日（二月十一日）に日本初の西洋式灯台・観音崎灯台が点灯開始しました。関門海峡周辺では大阪条約により、六連島灯台（下関市、明治四年点灯開始）と部埼灯台（門司区、明治五年点灯開始）、さらに角島灯台（下関市、明治九年点灯開始）などが建設されました。三基はともにイギリスの技術者で「日本灯台の父」と呼ばれたR・H・ブランドンが指導したもので、令和二年（二〇二〇）十二月に揃って、国の重要文化財（建造物）に指定されました。当初は木造だった白洲灯台の建設にもブランドンが関わっています。

2 航路標識業務

航路標識とは目に見える光や形を利用した光波標識や、電波を利用した電波標識のように、海を航行する船舶の道標となるものをいいます。航路標識は航路に設置されて航路の幅を示し、浅瀬や暗礁など危険な場所に目印として設置され、航海の安全になくはならないものとなっています。

光波標識には灯台・灯標・灯浮標などがあり、中で

も灯台は歴史が深く、江戸時代には「かがり屋」や「灯明台」と呼ばれる、石積みのお台の上に小屋を建て、中で木を燃やす仕組みの日本式灯台が建てられていました。その後、イギリス・フランスから建設技術を持った外国人技師が来日し、明治二年（一八六九）に神奈川県観音崎に西洋式灯台が誕生しました。

それまでの日本は諸外国から「ダーク・シー」（暗い海）と呼ばれ、海に囲まれているのに灯台の少ない国でした。灯台建設技術の広まりとともに、灯台建設の流れが加速化され、全国的に灯台が建設されていきました。明治の初めには外国へ行く船舶がほとんどなかった日本も、大正・昭和の時代になると世界でも指折りの海運・水産国へと発展していきました。

3 灯台の光源とレンズ

灯台の光を発射するための機器は時代とともに進歩してきました。明治初期には落花生油を燃焼させてその火炎を光源とするものが使用されましたが、改良が加えられ、石油・灯油を用いる灯器に変更されていきました。明治末になるとアセチレンガスを燃料としたガス灯器が輸入され、陸上・海上を問わず、電源が得られない場所では、昭和五十二年（一九七七）ごろま

で使用されてきました。

光源のみでは灯台の光を遠方に届かせることができないうことから、光を絞って遠くへ届くようにするため、レンズが使用されました。灯台用レンズは一八二二年にオーギュスタン・フレネルが考案したことから「フレネルレンズ」と呼ばれ、レンズの焦点距離によって一等から順に六等まで等級があります。フレネルレンズは凸レンズの表面部分を細かく分解し、段差を付けて並べてプリズムを配置し、大きさや厚みを抑えて重量を軽くしたものでした。

明治四十三年（一九一〇）には白熱電球が導入され、その後、大正・昭和時代に電力線が整備されるとともに、電気式灯器が普及していきました。現在は発光ダイオードを光源として使用するLED灯器が灯台用機器の主流となり、電源も太陽電池などの自然エネルギーで賄われるようになりました。

4 気象観測業務

明治二年（一八六九）に日本初の西洋式灯台・観音崎灯台が建設され、その後次々と全国に灯台が建設されると同時に、気象観測もおこなわれることとなりました。明治十年（一八七七）には三ヶ所の気象庁測候

所しかなかったのに対して、二六ヶ所の灯台で気象観測がおこなわれていました。明治十三年（一八八〇）時点でも気象庁測候所八ヶ所に対して灯台は三五ヶ所あり、観測密度は灯台での気象観測が多く、データは重宝されていました。

観測記録には風向・風速、気圧、気温（屋内外）、降水量などが含まれており、明治十四年（一八八一）までは一日二回、その後は一日四回の観測が記録されました。灯台の敷地内には気象舎と呼ばれる定点観測所が設けられ、定められた箇所 で定められた時間に観測して、結果は電鍵（モールス信号を発信する無線通信機）などを使用して気象庁測候所へ連絡しました。気象庁が設置する観測所が充足されるまで、灯台の観測データが当時の日本における気象業務において重要な役割を果たしてきたのです。気象観測業務は気象観測所の充足により、女島灯台を最後に、平成九年（一九九七）五月一日に業務終了となりました。

5 灯台業務用船

灯台業務用船には視察船、補給船、測定船、設標船、点検などに使用する灯台見回り船など様々な役割を担う船がありました。明治元年（一八六八）に西洋式灯

台建設の事業が始められると、灯台の位置測量、建築資材の運搬や業務状況視察のための船舶として、明治二年にイギリスのアスピネルコロン社所有汽船「ソングライス」を購入し、灯台視察船「燈明丸」と改め、業務に当たらせました。その後「テールボルト号」「明治丸」「新発田丸」「羅州丸」「第18日正丸」へ続き、昭和二十三年（一九四八）の海上保安庁発足に合わせ、灯台視察船の名称も灯台補給船に変更されました。昭和二十五年（一九五〇）には最初の専属補給船として、旧海軍から返還された「宗谷」が任務につき、「宗谷」が日本の南極観測船となると「若草」へと引き継がれました。その後、組織の変遷や灯台事業の発展に伴って航路標識や電波標識の性能試験業務が主流となり、昭和五十二年（一九七七）に航路標識測定船「つしま」が建造されました。また昭和戦後には浮標設置が必要となり、昭和二十六年（一九五一）に浮標設置用船が建造されました。

灯台の見回りや交通用として小型の端舟が利用されていましたが、標識数の増加のため、専用の船が求められ、明治二十八年（一八九五）に最初の航路標識管理所属艇（灯台見回り船）となる「光丸」が建造されました。灯台見回り船は全国各地で建造され、代替

わりを行いながら、今も業務を継続しています。

6 灯台守について

灯台に併設あるいは近接する家に滞在して、航路標識としての役割を果たすために維持・管理をおこなう職員を灯台守といえます。灯台守が常駐する有人灯台は次第に無人化されていき、最後の有人灯台であった長崎県五島市の女島灯台も平成十八年（二〇〇六）十二月五日に無人化されて、国内の灯台守は姿を消しました。本展にご協力いただいた前畑正信氏は最後の灯台守の一人です。

7 国指定重要文化財となった

関門海峡の3灯台

(1) 六連島灯台

関門海峡の西口に位置する六連島灯台は、兵庫開港に伴い瀬戸内海に整備された灯台五基の一つで、英国人技術者R・H・ブラントンの指導監督のもと、明治三年（一八七〇）十月に起工し、明治四年（一八七二）十一月二十一日に初点灯した石造の灯台です。同時期に関門海峡の東口に整備された部埼灯台（北九州市）と併せて「双子灯台」と呼ばれています。六連島灯台

の設置以降本格化する瀬戸内海航路の航路標識整備の礎として、また、関門海峡の近代航路標識史上で価値が高いものとして、令和二年（二〇二〇）十二月に国の重要文化財（建造物）に指定されました。また、ブラントンの指導監督により関門海峡の岩礁に建てられ、改造と下関市彦島の最南端への移築を経て残る旧組礁標も歴史的価値が高いものとして、重要文化財の附に指定されました。

(2) 部埼灯台

部埼灯台は関門海峡の東、門司区白野江の尾根上に建つ現役の灯台です。明治政府の「お雇い外国人」である英国人技術者R・H・ブラントンの指導によって、明治三年（一八七〇）末に建造が開始され、明治五年（一八七二）一月二十二日に初点灯しました。構造は方形の切り石を円筒形に積み上げた組積造で、建築当初の外観を残すものとしては九州最古の灯台です。敷地内には、灯台と同時に建てられた、かつては灯台守の宿舎として利用された旧官舎（昭和五十四年に潮流信号所に改築）や、刻々と変化する関門海峡の潮流方向を標識の形と腕木の角度で船舶に知らせた旧昼間潮流信号機（明治四十二年設置）も保存されてい

ます。これらはわが国における初期の西洋式灯台として貴重で、歴史的価値が高いものとして、令和二年十二月に国の重要文化財（建造物）に指定されました。

(3) 角島灯台

角島灯台は下関市の北西、響灘から日本海へ廻る交通の要衝に、日本海側に最初に設置された西洋式灯台で、現役の灯台です。英国人技術者R・H・ブランドンの指導監督により、明治六年（一八七三）八月に建設工事を開始し、当時の費用で四三、一六四円三一銭をかけて、明治八年（一八七五）十二月に落成し、翌九年（一八七六）三月一日に初点灯しました。総高は二九・六メートルあり、建設当時の石造灯台の中では日本一の高さを誇りました。徳山産の御影石を使用し、石材の精緻な加工には、当時の石造灯台の建設技術水準の高さが表れています。列強諸国の求めに応じて進められた航路標識整備に続いて、わが国の近代航路標識整備の展開を知るうえで重要であり、技術的に優秀なものであることから、灯台と同時期に建てられた外国人灯明番のための旧官舎や旧倉庫とともに、令和二年（二〇二〇）十二月に国の重要文化財（建造物）に指定されました。

※国指定重要文化財の三灯台の説明は関門海峡日本遺産協議会が作成したものに基づいています。



展示風景

標識技手（西澤 武）霧多布無線方位信号所ニテ殉死ス

国内最初の無線局だけの霧多布で

北の燈霧とうきり研修生 山 本 雅 晴

78年前の昭和20年7月15日、霧多布無線方位信号所通信機室で標識技手西澤武氏が、アメリカ軍艦載機による銃撃で殉死、年齢は20歳でした。燈光読者の皆様、航路標識関係の皆様、この事実をご存じだったでしょうか。

その後の調査（燈台局報第2号掲載内容など）から燈台官吏養成所第6回生で昭和19年2月29日卒業、最初の任命先は竜飛岬無線方位信号所となっておりましたが職員録（燈光会保管資料、昭和19年8月1日現在）では霧多布無線方位信号所の標識技手として記載されておりました。

太平洋戦争時において、北海道の昭和20年7月14日、15日はアメリカ軍艦載機による銃撃爆弾で宗谷、松山支庁を除くすべての支庁で死亡者がでており、航路標識事務所では現職一人が殉職する結果となりました。

20歳の若き命が散っていききました。（合掌）

私は、昭和45年から5年間釧路航路標識事務所に勤

務した際に、釧路市の職員が海上保安庁の職員で亡くなった人がいないか調査に来られたことがあります。事務所資料を調査した際、霧多布無線方位信号所職員が空襲で死亡した空襲被害記録メモが残っており、死亡職員がいたことは知っていました。その後は今日まで思い出すことはありませんでした。

霧多布無線方位信号所（方向探知及び標識）は昭和19年4月5日全国で初めて電波だけの標識として業務開始しました。北洋漁業航路として戦時輸送の動向に応じて計画整備されました。戦前では霧多布だけでした。

北海道で初めて開始したのは

恵山岬 昭和7年2月11日方向探知標識、北海道初

松 前 昭和8年9月15日標識開始

昭和9年3月15日方向探知追加

えりも岬 昭和9年12月15日方向探知標識開始

宗谷岬 昭和10年7月15日方向探知標識開始

以上皆燈台等が設置された場所での業務開始でした。

北海道空襲というのは、昭和20年7月14日、15日の2日間、アメリカ軍の艦載機が北海道を空襲したできごとです。道内で空襲を受けた市町村は79を数えます。おもに太平洋沿岸でしたが、日本海、オホーツク海側、また、内陸部でも被害がありました。松山、宗谷管内だけが空襲に見舞われていません。

北海道空襲の被害は、7月14日、15日の2日間の被害を集計すると、死者1958人、根室港、釧路港、室蘭港、函館港、小樽港、津軽海峡、各市町村79で命をおとしていました。

〔語りつぐ北海道空襲〕菊地慶一／著、北海道新聞社、2007.8.15発行のはじめにより）

第6―2表 月別空襲回数（19年12月から20年8月まで）

地区、19年12月、20年1月、2月、3月、4月、5月、6月、7月、8月、計、で北海道地区は7月の21回でした。

（日本燈台史 戦争末期の事業。ページ75より）

北海道地区の21回の内訳は7月14日、根室弁天島灯台、厚岸灯台、襟裳岬灯台、恵山岬灯台の4回、15日、根室弁天島灯台、霧多布無線、厚岸灯台、襟裳岬灯台、恵山岬灯台、石狩灯台の6回です。ほかに空襲が想定される箇所は戦後復旧事業実施箇所である能取岬灯台、室蘭灯台、汐首岬灯台、松前無線、日和山灯台です。合計5カ所×2回で10回となり、合計20回となります。釧路埼無線として空襲被害がありました。釧路埼灯台にはありませんでした。昭和20年7月では燈台局施設ではありませんので含めませんでした。

天明安枝さん（弁天島灯台長鈴木重茂の長女）は、本誌昭和58年9月号から6回にわたり「根室弁天島灯台の日々」と題して、島での6年間の生活を連載投稿しており、平成2年根室空襲研究会による根室空襲証言依頼募集に応じて、「弁天島灯台が倒れる日まで」と題して、当時、根室高女1年生がみた弁天島灯台での出来事を発表されました。根室空襲保存会ではこの証言から紙芝化し、その後DVDまで発刊されています。根室市では根室空襲における忘れないための行事が開かれていましたが私は参加することはありませんでした。

母幸枝さんから根室空襲体験談を聞いて、アメリカ人関係者との会話の中から絵本の制作計画が持ち上がり、絵本のコメント、絵を担当することとなり、2002年現地根室市訪問、弁天島にも上陸調査していった。

78年前の出来事は根室だけではありませんでした。

忘れてはいけない事でした。根室弁天島灯台、霧多布無線、厚岸灯台、襟裳岬灯台、室蘭灯台、恵山岬灯台、(合掌)

昭和17年3月海軍省、通信省間の協定に基づき、航路標識は防空監視網に組み入れられ、各灯台で防空および海上監視を行うことになった。結果、各灯台等で報告様式「戦災被害調査記録」が作成されたものと思われる。

各地の灯台はいち早く敵機を発見する好適の位置であるので、17年3月海軍省、通信省間の協定に基づき、航路標識は防空監視網に組み入れられ、各灯台で防空および海上監視を行うことになった。17年度予算で通信連絡設備のない灯台の整備がはかられ、はからずも全国ほとんどの灯台に電話、あるいはその他の通信施設が設けられ、僻地灯台の永年の希望が戦時下にあっ

て実現することになった。

(日本燈台史 戦時下事業 ページ63より)

霧多布無線方位信号所の戦災被害調査記録メモは以下のとおりです。

霧多布 戦災被害調査記録メモ

霧多布無線方位信号所

昭和20年7月15日 戦災被害調査記録

1 標識名及び所在地

霧多布無線方位信号所

北海道厚岸郡浜中村大字霧多布字湯沸

2 被襲回数及び区別

昭和27年7月15日 空襲1回十数度

3 被害の大別

事務所建、住宅建、倉庫建、雑居建の各建物小

破及び無線方位信号所各機器小破、空中線大破(各

詳細記事あり、省略)

4 被害物件及び区別並びに対策措置

(害物件及び区別の詳細省略)

前記被宅に対する措置に関しては資材及び労力極度に払底のため正式修理不能なるを以て現在庫

資材を活用し、労力は所員提供のこととし応急措置を施し7月中に業務執行支障なきに至る残余は遂次労力を考慮復旧のこととせり

5 殉職殉難等の事項

(別に記載)

6 当時の在勤者及び居住家族一覽

在勤者灯台長標識技手

橋場 文則(39歳)

在勤者

西澤 武(20歳)

備 人

操機夫

平野取太郎(42歳)

居住家族 橋場標識技手妻

橋場 淑子(36歳)

ゝ 二女 准子(8歳)

7 被襲の状況

(別に記載)

8 関係警報の受領状況

開戦より終戦までの期間に於いて受領したる情報又は注意報 21回

警戒警報 13回

空襲警報 8回

空襲回数 1回

地元の協力援助

(別に記載)

10 其の他参考となるべき事項

(別に記載)

私は空襲警報が発令されながら何故防空壕など安全な場所に避難しないのか?不思議だったので防空および海上監視の業務を実施することとなっていたことがわかり、警報発令時に防空壕に避難することはないのでと判断しました。

また、有線、無線の監視連絡体制が確立されており、霧多布でも根室か釧路局への連絡体制ができていたと思われれます。(当日両局とも空襲を受けていましたのではありません。)

上記項目5から10の記載内容から当時の様子が伝わってきます。

7 被襲の状況、5 殉職殉難等の事項、9 地元の協力援助、10 其の他参考となるべき事項、について

7 被襲の状況

7月15日午前中4時50分当地区警戒警報発令、

全5時40分空襲警報発令、各警報当時有線不通のため無線受信にて受領。

橋場標識技手は防空監視当直に、西澤標識技手

は無線当直に各々其の部署に就き待機中、全6時

5分頃に至り西方に爆音らしきものあり■ありて敵艦上機を認め注視中の処当所北方20キロメートルを高度200メートルを接し、鉄道線路に沿って東方に向ひあり既に当地を通過根室方面に向いたるに急遽機首を当所に向けたると見るや数拾秒にして当所上空に至り各機入り乱れ交互に拾数回反復爆撃等を敢行せり、橋場西澤標識技手は直ちに通信室内最安全個所に待機したるも時既に遅く西澤標識技手は腹部に貫通銃創を受け殉死せり、思うに敵機は近傍に何等の攻撃設備なきため跳梁を恣にしたる結果建物内部に被弾を蒙りたるものと認められる。

小型爆弾5個は孰れも構外に落下爆弾による被害皆無なりき。

5 殉職殉難等の事項

当時通信室に在りて勤務中の西澤武標識技手は敵機頭上に飛来するも其の職場を死守し、敢斗中敵機銃弾を腹部に受け不幸殉死せり

9 地元の協力援助

霧多布警防団よりは当地区警報発令の際は其の都度団員2名乃至3名を当所に派遣業務其の他の雑務を協力業務執行に幾多の便宜を賜りたり。ま

た物置の一部に火災を生じたる際は霧多布消防団員拾数名来援消火に協力したる結果大事に至らずして鎮火す、其の勞に負う処大なりき。

なお西澤標識技手殉難に当たりは霧多布女子警防団員及び霧多布郵便局員、湯沸部落第一班員の献身的協力に負う処大なりき。

10 其の他参考となるべき事項

当所付近には特記すべき被災箇所なかりしも湯沸部落中田栄作所存溶度工場（当所より約十町）近傍道路に落下せる小型爆弾により附近居住村民某の才息女（当21歳）被弾即死せり。

今年8月中旬、浜中町の町長、教育長あてに当時の町の関係者照会、無線局写真の有無など町民の皆さまへ浜中広報誌を通じて情報提供のお願いを依頼したところです。燈光読者の皆様にお願ひです。燈台官吏養成所第6期生の関係者、霧多布無線方位信号所勤務経験者、霧多布無線局の写真及び西澤武様の情報など、ご連絡いただきたくよろしくお願ひ申し上げます。

最後に、西澤武氏の情報調査に当たり燈光会事務局に大変お世話になりました。この場を借りて感謝いたします。

戦前の南洋群島における丹野久助氏の活躍

— パラオ諸島における灯台建設史 —

常磐会学園大学 井 上 敏 孝



1 はじめに

本稿は戦前の大日本帝国下の各地で実施されたインフラ建設の技術的特徴や歴史的意義を説明する研究の一環として、南洋群島におけるインフラ建設に尽力した人物にスポットを当て、同技師が当該地域において果たした役割や功績について明らかにするものである。

ここで分析を行うのは丹野久助氏で、戦前の南洋群島における灯台建設をはじめ港湾建設等の各種インフラ建設に主導的な役割を担ったことで、海軍さらには南洋庁から表彰を受けた人物であった。

しかし、当該分野の先行研究として挙げられものとして1914～1922年までの軍政下における南洋群島での海軍による建築活動の一端について明らかにした辻原万規彦・安浪夕佳「臨時軍事費営繕工事訓令からみた軍政期南洋群島における建築活動」(1)が

ある。しかし、同研究では本稿で分析対象とする灯台建設に関する記述は概要の域を出ない。また、戦前の南洋群島における丹野技師が大きく関わっていたことに着目し、明らかにしたものとしては、倉田洋二・上杉誠・諸川由実代・笹倉江身子・安斎晃『パラオ歴史探訪 倉田洋二と歩く南洋群島』(2)のみである。

同書では南洋群島における灯台建設等に丹野氏が携わっていた点、さらにはその活躍の一端が紹介されている。しかしながら丹野氏の経緯や同氏が建設に携わった灯台が建設に至った背景や同地の地理的状况等については明らかにされていない点も少なくない。

加えて、そもそも日本統治下にあった南洋群島におけるインフラ建設の詳細や技術的特徴、かかわった技師等に関する研究自体少ないのが現状である。

以上のことを踏まえて、本研究では先行研究の成果と課題を踏まえつつ、著者が新たに発掘した史資料分析等を組み合わせた研究手法を採る。そして、明らか

になった成果がインフラ建設の全体像を明らかにする研究の一端となることを目指す。

2 南洋群島の沿革

日本が委任統治することとなった南洋群島は赤道以北に位置するマリアナ・カロリン・マーシャルの3つの群島を総称したものである。北東にはハワイ、南東には南太平洋諸島、西にはフィリピン諸島及びセレベス島、北には、小笠原諸島及び硫黄島を望み日本本土からは約3,400キロメートルの南方に位置している。その範囲は東経130度から175度、北緯0度から22度に及び、包容する海面は東西約5,000キロメートル、南北約2,400キロメートルにわたる広大なものであり、ここに大小1,400あまりの島嶼が散在していた。ただし、島嶼を構成するのは小さな島々であり陸地の総面積は2,149平方キロメートルに過ぎない規模であった(3)。これは2,188平方キロメートルの東京都とほぼ同じ面積であり、総面積が377,914平方キロメートルの日本や、35,980平方キロメートルである台湾と比べると同群島が如何に小規模な島々であったかが窺えよう。

以上の南洋群島における日本の進出は第一次世界大

戦時ドイツ領であったこれらの島を海軍が占領したことに始まる。この際、日本は臨時南洋防備隊を置き、実際の施政は国防備隊が行うこととなった(4)。そして1919年国際連盟規約第22条により旧ドイツ領の南洋群島の統治を日本に委任することが決定したことで、同年国際連盟の最高会議によって同群島は大日本帝国の領土の構成部分として日本の法の下に統治されることに確定した(5)。

これにより日本は1924年、南洋群島全般の行政を司るため南洋庁をパラオに開庁、その支庁をサイパン・ヤップ・パラオ・トラック・ポナペ・及びヤルトの6か所に設置し、南洋開発の指導に当たることとなった(6)。

3 パラオ諸島における灯台建設の背景

本稿で分析対象とする灯台建設がなされたのは同南洋群島内のパラオ諸島であった。パラオ諸島は、北からカヤンガル島・バベルダオブ島(パラオ本島)・アラカベサン島・コロール島・マラカル島・ウルクターブル島・ペリリユー島・アンガウル島をはじめ南北に連鎖状に並んだ多数の島嶼で構成されていた(7)。各島の位置については図1を参照されたい。

パラオ諸島間における交通は、全て水路による外はなかったものの、各島の周辺はサンゴ礁の浅瀬で囲まれている、なおかつ水路もその多くがサンゴ礁等により曲折し、船舶の航行には困難を要していた。そのため、パラオに出入港する船舶の航路は限定され、その中でも大型船が通行可能な水路は、2ないし3つであった(8)。

ドイツ統治時代以前は、喫水が浅い小型の木造船で島内交通さらには大洋を航行していたため、大型船の寄港等は皆無と言っていい状態であった。

しかし、ドイツによる統治が始まって以降、汽船の寄港も見られるようになったため、同時代には、すぐに航路標識が設置されていた(9)。さらには日本統治が開始されるに至っては内地―南洋群島間を結ぶ交通連絡の観点から、大型船の渡航の必要性が飛躍的に高まることとなった。そのため、以上の航路標識の設置についても「常に意を用ひ」られることとなった(10)。さらには南洋庁が設置されたことで、その業務は海軍から南洋庁に引き継がれ、なおかつ事務は同庁内務部地方課が主管することとなった。そして1924年12月には、同業務は通信課に移管。翌年9月には庁令第13号を以て南洋群島航路標識規則が制定され、

同時に訓令田148号を以て南洋庁航路標識取締規則及び同航路標識形式標準、ならびに灯台看守心得が定められている(11)。

こうした経緯を経て、日本統治が開始されて以後には、大型船が可能な水路上の近くにウルクタープル灯台・マラル港における2基の灯標・中ノ礁灯浮標・アルコロン灯台・アンガウル灯台の3基の灯台と2基の浮標と1基の灯浮標が建設されることとなった(12)。そして、これらの灯台等の建設に関わった人物が本稿で分析対象とする丹野久助氏であった。

3 丹野久助技師

ここでは本稿で着目する丹野技師の略歴等について概括したい(13)。

1891年に宮城県仙台市で生まれた丹野久助氏は、その後、1910年に志願兵として横須賀海兵団に入団した。

同氏が南洋群島とのかかわりを持つ契機となったのが、1914年の第一次世界大戦時であった。具体的には同年8月に軍艦鞍馬乗組1等水兵として日独戦役に従事し、南洋ヤルト・クサイ・ポナペ・トラック諸島を占領したことによるものであった。

その際、海軍南遣技隊軍艦朝日の乗組員として同地に派遣され、ヤルト島占領後は、トラック守備隊に編入され、隊内係を務めていた。そして軍政時代はパラオに留まり、現地では「鬼兵曹」と言われたものの、あらゆることに對して率先して事に当たるを流儀としていた丹野氏は、島民から畏敬されることとなった(14)。1922年に南洋庁が開設され、防備隊が引き上げることになる際、同庁当局からの強い要望により、同地に留まることになり、予備役として南洋庁に残り、パラオ支庁のランチの艇長を務め、丹野艇長としても親しまれていた(15)。

パラオ諸島において灯台に関する業務を直接担当するようになったのは同年であり、11月から航路標識の事務をすることとなった。当初、南洋群島における航路標識は極めて簡単なもので、灯台を名の付くものは、マングローブの丸太を組み合わせて作った簡単なものであった。そのような状況の中で、丹生氏はパラオ諸島を初め南洋群島全域における灯台建設及びその事務作業を担当することとなっていく。

南洋群島というものの、上述した通り、その区域は千島の北端の占守島から台湾の南端の鵝鑾鼻に至るほど広大であった。その中の大小2,000余りの島々

を一手に引き受けることとなったというところで、その業務量の多さは想像に難くない。しかしながら、同氏は、時には自ら率先して海中に入り測量等の作業をこなすなど、灯台建設に身を挺して着実に業務を遂行していき、こととなった(16)。

具体的には航路標識の改善、各地での灯台建設を計画し、その実行は全て丹野氏が担うこととなった。そして次から次へと立派な灯台を建設して、南洋方面における燈台建設の第一の権威者となっていた。

その後、1934年には囑託として交通課技手、さらには航路標識係の主任となった(17)。

その経歴は南洋庁官吏中最も異色の存在として知られるとともに、南洋群島開発における同氏の足跡は極めて大きいとして評価されていた(18)。

これらの功績から1935年には海軍から表彰を受け、木杯1組が贈与されることとなった。功労者として丹野氏が海軍から表彰されるに至った経緯として軍の資料によると以下の通りであった(19)。

大正三年以来二十年一日ノ如ク海軍及南洋群島の爲ニ盡瘁シ來レル者ニシテ大正十一年臨時南洋群島防備隊ヨリ南洋廳ニ引継ギタル際ハ特ニ南洋廳ノ切望ニ依

リテ滿期ト同時ニ同廳ニ就職シ爾來滄ルコトナキ同人ノ誠意努力ニ對シテハ南洋廳官民ノ齊シク感嘆スル處ナリ殊ニ海軍ニ對シテハ滿腔ノ熱誠ヲ以テ事ニ當リ歴代在勤武官ヲ援助スルノミナラズ克ク海軍出身者ヲ統制シ稀ニ見ル熱誠ナル在郷軍人團トシテ水友會ヲ組織シ海軍艦船寄港ノ際ニハ盡力至ラザル處ナク乘員一同常ニ感謝シテ港ヲ辭スルヲ例トス昨年膠州坐礁ノ際ノ如キハ數日ニ亘リ不眠不休之方救助及善後作業ニ盡力シ又練習艦隊清水補給作業ニ於テ請負業者ガ不可能トシタルヲ率先引受ケ萬難ヲ排シテ之ヲ完了シ或ハ國防獻金ノ議起ルヤ眞先ニ水友會員ヲ勵マシテ相當巨額ノ獻納ヲナシ又パラオ海軍墓地ノ保存改修ノ如キハ之迄主トシテ同人ノ手ニ依リテナサレ其ノ主務トセル南洋群島航路標識ノ新設改修ハ殆ンド同人ノ努力ニヨリテ成レル等功績著シキモノアリ同人ノ如キハ洵ニ在郷軍人ノ龜鑑トシテ推奨スルニ足ルモノト認メラルヲ以テ海軍記念日又ハ南洋群島占領記念(十月三日)等適當ノ機会ニ於テ表彰(銀杯一個授與)方御詮議相成度昭和九年官房5,000號ニ依リ具申ス

以上のように海軍においても南洋群島において長きにわたる丹野氏の功績が認識され、評価されていたこ

とが分かる。

特に南洋群島における航路標識の「新設改修」のほとんどが丹野氏の手によっていたこと等について明確にされている点は注目に値するといえよう。

加えて1943年には挙行された南洋群島始政25周年記念式典では25年以上の精勤者の一人として同氏が表彰されている(20)。

ちなみに丹野氏は南洋群島における港湾工事の際に、自らが工事に従事した際に収集した多数の造礁珊瑚その他の標本を学会に寄与するということも行っていた(21)。

さらには、以上の業務に限らず、「萬事率先して事に當る」という姿勢で(南洋群島の思い出、p.95)、島民とも協働を重ねていったことで、時に畏怖されながら、現地の人々の信頼を得ていった。そのため「南洋群島に於て長官の名を知らぬ者はあつても、丹野さんといへばカナカ迄知らぬ者はないといわれる」ほどであった(22)。そして、その人柄から丹野氏は「南洋群島の親分のような人」とも呼ばれていた(23)。

同氏は、パラオ本島のガスパン村の防空壕で病気により終戦を待たずしてこの世を去ったとされている(24)。

以上のような功績から、丹野氏は「終生を南洋群島のためにささげた典型的な人」との評されてもいた(25)。

4 灯台及び灯標建設の詳細

本章では先述した通り日本統治期にパラオ諸島で建設された6基の灯台及び灯標・灯浮標を概括するとともに、丹野技師とのつながり等について明らかにしたい。各灯台等の位置と諸元についてはそれぞれ図1と表2を参照されたい。

(1) ウルクタープル(パラオ)灯台

パラオ諸島における灯台建設の嚆矢となったのは、ウルクタープル島に建設されたウルクタープル灯台であった。

具体的には、同灯台は海軍によって同島の山頂に建設され、1923年、12月に完成した(26)。高さ189メートルの位置から光達16.5哩の白色肉光を発する第5等灯台で(27)、1924年3月1日に点灯が開始されることとなった(28)。

ウルクタープル島東北端の切り立った山の上にあった同灯台は東方を航行する船舶からもよく見えたとき

れる(29)。同灯台の詳細については図2を参照されたい。

ちなみに同工事は建設地の地質や材料運搬の問題等から難工事となったために工事費が2倍に増額された(30)。

また、その設計に当たっては、横須賀海軍経理部付の藤田専治海軍技手が「横須賀海軍経理部建築科ニ於テ澄田技師及鈴木技師ノ下」で「工事ノ設計」を担当したとされる(31)。

同灯台に関して上述の丹野氏は、海軍の一等兵曹として現地において実際の建設工事に携わったものと思われる。

ただし同灯台は、大東亜戦争末期にアメリカ軍の爆撃によって破壊され、その後も再建されることはなかった。現存するのは、灯台の基盤等のみであり、灯台があった場所は、うっそうとしたジャングルに囲まれ、ツタやガジュマルが絡みついており、往時の様子を偲ぶことは難しいとされる(32)。

(2) マラカル港灯標(第23番・第1番)・中ノ礁灯浮標

マラカル港における第23番・第1番灯標は、共に港へと続くマラカル港周辺の海上に建設されていた。ま

ず前者はマラカル島南東岸から突出した礁脈の外端に、後者はマラカル水道入口の西側入口に建設されていた(33)。両灯標はマラカル港を出入港する船舶にとって、港の位置と航路を示す非常に重要な灯台としての役割を担っていた。

なかでもマラカル水道の入り口にあった第1番灯標は、入港する船舶が、同標を目印の一つとしてマラカル水道を通って港に出入りしていた(34)。さらに東方からマラカル灯台に入るためには中ノ礁灯浮標の北東部を通過し、マラカル水道を開視後、同水道に向かうこととなっていた(35)。

これらの灯標のうち、第1番灯標については、戦火を免れたものの、2012年にあった大型台風の直撃を受けたことで、同標は被害を受け、当時の姿をみる事ができなくなっている。

(3) アルコロン(バベルダオブ島) 灯台

アルコロン灯台は、パラオ諸島の北部に位置するバベルダオブ島に建設された灯台であった(36)。そのため日本内地等からパラオを目指して航海してきた船舶にとって、パラオの北の玄関口に建設された同灯台は、「パラオへの到着を示すものであった」(37)。そ

してアルコロン灯台が見えると、航路は東西2航路に分かれ、一方は諸島西部の西水道を通り穏やかなサンゴ礁内を南下して、マラカル港を指すという流れであった。もう一方の諸島東部では、パラオ本島の東側を南下し、ウルクタープル島の山頂に建設された上述のウルクタープル灯台を指して進む。そしてその後、最後に目に入ってくるのが、上述のマラカル港の入り口の海上に建設された灯標であった。

アルコロン灯台もアメリカ軍との戦いの中で破壊されたものの、同灯台跡地は「TODAI」として、その呼び名が現地の地名として定着しているとされる(38)。

(4) アンガウル灯台

アンガウル島西港の北部にあった海拔70メートルの石灰岩の小高い丘の上に建設されたのがアンガウル灯台で(39)、1941年に点灯が開始された(40)。日本統治時代に建設された同灯台は、上述の灯台と灯標等と同様に建設者の名前にちなみ「丹野灯台」とも呼ばれていた(41)。同灯台の諸元は、表2を参照されたい。

ちなみに上述したアルコロン灯台とアンガウル灯台

の2灯台は有人で、ウルクタープル灯台とマラカル港周辺における灯標等は無人であった(42)。

アンガウル島におけるアンガウル灯台は、1944年12月にアメリカ軍の艦砲射撃により倒壊してしまい、同灯台は横倒しになったままであるものの、今もその姿を見ることができ(43)。

4 おわりに

本稿では戦前の南洋群島における灯台建設を巡る知られざる歴史と、同建設に携わった人物にスポットを当て、その知られざる歴史の一端について明らかにしてきた。ここで明らかにできた点は大きく2点である。

まず、1点目は日本統治下にあったパラオ諸島における灯台や灯標が建設された背景と経緯について系統的に明らかにできた点である。また先行研究の成果と課題を踏まえつつ建設された各灯台の諸元等について概括的に説明することができた。

2点目は、同地域の灯台建設において主導的な役割を發揮した人物について明らかにできた点である。具体的にはパラオ諸島における灯台等の建設に主導的な役割を果たした丹野久助氏にスポットを当て、灯台建設を巡る同氏の功績の一端について明らかにすることが

できたと考える。

本稿で明らかにできなかったパラオ諸島を始め南洋群島下で丹野氏が携わった灯台以外のインフラ建設の詳細については別稿で明らかにしたい。

注

- (1) 辻原万規彦・安浪夕佳「臨時軍事費営繕工事訓令からみた軍政期南洋群島における建築活動」『日本建築学会学術講演梗概集(中国)』、2008年、p.p.9106-9107
- (2) 倉田洋二・上杉誠・諸川由実代・笹倉江身子・安齋晃『パラオ歴史探訪 倉田洋二と歩く南洋群島』、2023年
- (3) 南洋庁長官官房『南洋庁施政十年史』南洋庁、1932年、p.p.112及び井上敏孝「大日本航空株式会社による南洋定期航空路に関する一考察」『常磐会学園大学研究紀要』(20)、2020年。p.3
- (4) 「燐鉱関係(4)」JACAR(アジア歴史資料センター) Ref. C10128188700、大正3年〜9年 大正戦役 戦時書類 卷50 南洋群島関係35(防衛省防衛研究所)

- (5) 前掲書(3)、p. 35-36
- (6) 日本航空協会『日本航空史 昭和前期編』、1975年、p. 742
- (7) 江口元起「南洋パラオ群島の珊瑚及珊瑚礁（豫報）」『東北帝國大學理學部地質學古生物學教室研究邦文報告』16卷、1935年、p. 1-4
- (8) 前掲書(3)、p. 438
- (9) 同上
- (10) 同上
- (11) 同上書、p. 438-439
- (12) 南洋庁『委任統治地域南洋群島調査資料 第1輯』、1927年、p. 489-490及びパラオ歴史探訪、p. 4
- (13) 「第3748号 10. 9. 9 功労者表彰の件 元海軍1等兵曹 丹野 久助」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C05034045500、公文備考 昭和10年 B 人事 卷31（防衛省防衛研究所）
- (14) 南洋経済研究所『南洋経済研究』6(2)、1943年、p. 29
- (15) 海洋気象学会『海と空』18(10)、1938年、p. 19
- (16) 同上
- (17) 部鶴之助『群制廃止記念名譽職員写真帖』、1928年、p. 79及び南洋庁長官官房秘書課『南洋庁職員録 昭和16年10月1日現在』、1941年、p. 112
- (18) 大南洋興信録編纂会『大南洋興信録』第1輯、1938年、p. 79
- (19) 「第3748号 10. 9. 9 功労者表彰の件 元海軍1等兵曹 丹野 久助」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C05034045500、公文備考 昭和10年 B 人事 卷31（防衛省防衛研究所）
- (20) 南洋群島協会『思い出の南洋群島』、1965年、p. 95
- (21) 太平洋協会『南洋群島—自然と資源—』、1940年、p. 137
- (22) 前掲書(14)、p. 29
- (23) 前掲書(15)、p. 19
- (24) 前掲書(20)、p. 103
- (25) 同上書、p. 112
- (26) 日本港湾協会『港湾』2卷3号、1924年、p. 98
- (27) 外務省『日本帝国委任統治行政年報1926年度』、1927年、p. 113
- (28) 前掲書(3)、p. 439
- (29) 前掲書(2)、p. 4
- (30) 「臨時軍事費営繕費工事訓令(2)」JACAR（アジア

- (31) 前掲論文(1)、p. 4
 (32) 前掲論文(1)、p. 4
 (33) 水路局『灯台表 第2巻』書誌第411号、1949年、pp. 617
 (34) 伊藤豊次・佐藤碩成『南方開発資料 内南洋篇・ニューギニア篇』、1942年、p. 18
 (35) 水路部・日本郵船『水要報 第8年』第11号第84号及び海上保安庁水路部『大洋航路誌』第401号、1959年、p. 62
 (36) 海上保安庁水路部『灯台表』第2巻、1958年、p. 18
 (37) 前掲書(2)、p. 96
 (38) 同上
 (39) 防衛庁防衛研修所戦史室『中部太平洋陸軍作戦 第2(ペリリユー・アングウル・硫黄島)(戦史叢書)』、1968年、p. 55
 (40) 大蔵省印刷局『官報』1940年3月27日、1940年、p. 1018
 (41) 前掲書(2)、p. 250
 (42) 前掲書(36)、pp. 617
 (43) 前掲書(2)、p. 250

ア歴史資料センター) Ref. C08050937
 000、大正12年 公文備考 巻135 土木(防衛省防衛研究所)

表1 丹野久助氏の略歴

年月日		
1905年3月	仙台市木町通高等小学校卒業	
1907年3月	宮城県立仙台第1中学校第2学年修業	
1910年6月1日	海軍志願兵として横須賀海兵団入団	
	5等水兵	
1913年12月31日	砲術練習生として海軍砲術学校に入校を命じられる。	横須賀海兵団
1914年7月31日	同校卒業退校復帰	
1914年8月23日	軍艦鞍馬乗組1等水兵として日独戦役に従事 南洋ヤルート・クサイ・ポナベ・トラック諸島占領	
1915年11月7日	1914・1915年戦役の功により叙勲8等白色桐葉賞 賜金150円並びに従軍記章授与される	賞勲局
1916年5月1日	任海軍3等兵曹	横須賀鎮守府
1917年11月23日	臨時南洋群島防備隊パラオ守備隊に転勤	
1918年5月1日	任海軍2等兵曹	横須賀鎮守府
1918年11月7日	横須賀海兵団に転勤	
1920年4月3日	臨時南洋群島防備隊トラック守備隊に転勤	横須賀鎮守府
1920年9月1日	同防備隊パラオ守備隊に転勤	

年月日		
1920年11月1日	任海軍1等兵曹	横須賀鎮守府
	1915年乃至1920年戦役の功により賜金170円及従軍記章授与	賞勲局
1920年12月1日	叙勲7等授瑞宝章	
1922年4月	現役満期予備役編入	横須賀海兵団
1922年4月30日	艦長を命ず	
1922年4月30日	月給60円を給す	パラオ支庁
1922年9月30日	月給62円を給す	
1922年11月20日	航路標識事務担当	
1923年3月31日	給月給64円50銭	
1924年9月30日	給月給68円	
1924年9月30日	月給71円を給す	
1927年3月31日	月給75円を給す	
1928年7月20日	兼圖南丸艦長を命ず	南洋庁
	財務課勤務を命ず	
1929年3月31日	月給77円を給す	パラオ支庁
1930年3月4日	南洋庁へ出向を命ず	
1930年3月9日	雇を命ず	南洋庁
	月給60円を給す	
	通信課勤務を命ず	
1931年9月30日	月給62円を給す	南洋庁
1932年5月9日	パラオ支庁兼務を命ず	パラオ支庁
	警務係兼庶務係勤務を命ず	
1932年12月27日	コロール消防組々頭を命ず	南洋庁
1933年3月31日	月給65円を給す	南洋庁
1934年3月31日	月給68円を給す	
1934年8月1日	事務の都合により雇を免ず	
1934年8月1日	事務を嘱託す	
	月手当150円を給与	
	通信課勤務を命ず	
	警務係兼庶務係勤務を命ず	パラオ支庁

出所)「第3748号 10. 9. 9 功労者表彰の件 元海軍1等兵曹 丹野 久助」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C05034045500、公文備考 昭和10年 B 人事 巻31 (防衛省防衛研究所) から著者が作成したもの。

表2 パラオ諸島における灯台・灯標等の諸元一覧

	名称・灯類	位置	初点年	塗色・構造	等級・燈質	明弧	燈高	光達距離
①	ウルクタープル (パラオ) 灯台	ウルクタープル島東端山頂	1924年	白色円形コンクリート造	第5等 明暗白色 毎6秒に1光、 明3秒、暗3秒	114～67度	基礎7.6m、 平均水面上 189m	16.5浬
②	マラカル港第23番灯標	マラカル島南東岩から突出する礁脈の外端	1937年	白色円形コンクリート造	不動白色		平均水面上 7m	6浬

	名称・灯類	位置	初点年	塗色・構造	等級・燈質	明弧	燈高	光達距離
③	マラカル港第1番灯標	マラカル港水道入口西側	1938年	白色円形コンクリート造	明暗白色 毎6秒に1光、明3秒、暗3		平均水面上 10m	10.5哩
④	中ノ礁灯浮標	ウルクターブル灯台の東南東方約2.3km	1938年	紅黒横線円筒形上部やぐら型鉄造	閃白光 毎3秒に1閃光		平均水面上 3.7m	8哩
⑤	アルコロン（バベルダオブ島）灯台	バベルダオブ島北端	不明	白色円形コンクリート造	毎12秒に1閃光		平均水面上 134m	28哩
⑥	アンガウル灯台	パラオ諸島アンガウル島西北端	1941年	白色円形コンクリート造	第3等石油自熱燈連閃白光毎18秒を隔て6秒間に2閃光	全度	基礎27m、 平均水面上 64m	晴天の夜 で22哩 光力 20万燭光

出所) 大蔵省印刷局『官報』1940年3月27日、1940年、p.1018、水路局『灯台表 第2巻』書誌第411号、1949年、pp.6-7、海上保安庁『南洋群島水路誌—マリアナ諸島・カロリン諸島・マーシャル諸島 改版一』、第210号、1955年、p.59、海上保安庁水路部『灯台表』第2巻、1958年、p.18から著者が作成したもの。

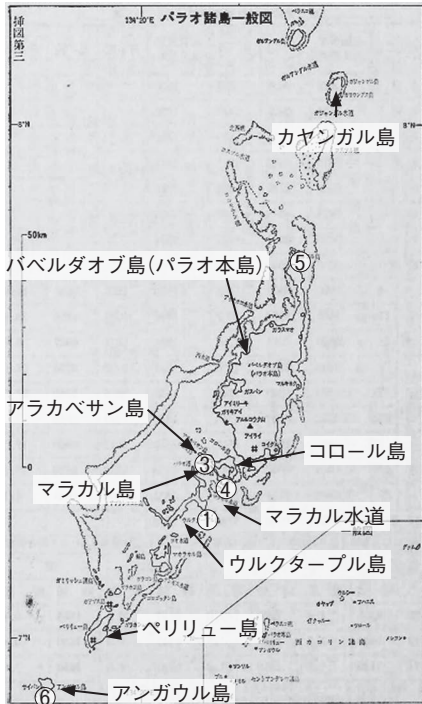


図1 パラオ諸島地図

出所) 防衛庁防衛研修所戦史室『中部太平洋陸軍作戦 第2 (ペリリュー・アンガウル・硫黄島) (戦史叢書)』、1968年から転載したもの。

注) 図中①～⑥は表2中の①～⑥の灯台及び灯標・灯浮標の位置を指す。

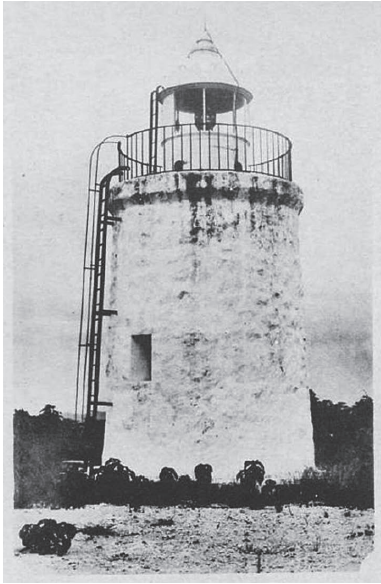


図2 ウルクタープル灯台
出所) 南洋協會南洋群島支部『南洋群島寫眞帖
再版』、1925年から転載したもの。



原稿募集 ～灯台記念日イベント関連～

本年、155周年灯台記念日を迎えました。全国各地で灯台の一般公開等イベントが開催されたことと思います。誌面を通して各地のイベントの様を、会員の皆様へお伝えできればと思いますので、ぜひ、本誌へのご投稿お待ちしております。

原稿送付先：jigyo2@tokokai.org



伊豆の下田から南に海路11キロ、方向によっては巨大な鯨が浮上しているようにも見える岩礁だけの島がある。この一木もない岩だけの島の最高所に、唯一の近代建物として立つのが神子元島灯台である。

私の父は、1935（昭和10）年から3年間、この灯台に勤務した。私が幼稚園から小学校1年までの間である。

神子元島灯台では、家族同居の勤務で石造りの退息所があったが、便船はおろか漁船も立ち寄らないこの島での生活は厳しく、下田などへ別居する家族が多かった。このためか、燈台局は昭和7年に下田町内に借家を求めて家族用の宿舎としたので、母と私に妹の3人の家族はこの宿舎に入居できた。もっとも当時は、下田近傍の無人灯台を神子元島灯台が管理していたので、灯台員のうち一人が交代勤務で下田に駐在した。この職員の宿舎にあてられているのが本来の設置目的だったのだろう。幼い私の記憶では、灯台員は島に20日（30日？）

と下田に10日の勤務体制だったように思うが、父の下田駐在時は一家とともに暮らせる嬉しい時だった。

それでも、比較的に海が穏やかだった夏は、学校が休みに入ると家族も島に渡って一緒に暮らすことが通例となっていた。下田に来て2年目のこの年の夏、母は小学校入学前の私と2歳の妹を連れて島に渡った。前年は妹が小さかったために行けなかったもので、これが私にとっては初めての渡島だった。

島では、同じ灯台員の子らと、西側にある島唯一の入り江で泳いだり魚釣りをしたりして遊んだ。父に連れられて灯塔にも上った。螺旋階段を上り詰め、石油の匂いが立ち込めている灯室で巨大なレンズを見てから展望台に出た。そこは目もくらむような高さで、たちまち足が竦んでしまったが、父に縋りついてこわごわ見回すと、南に遠く新島や神津島などの島々が浮かんでおり、眼下には太平洋の長濤が断崖に打ち寄せて牙をむいていた。この雄大な光景は今も目に焼き付いている。

ある日、母と入り江で海草や貝採りをして帰る途中、先を歩いていた私は道の傍らに高さ1メートルほどの石柱を見つけた。それは明らかに島の岩とは違った色合いをしており、表面には微かに文字らしきものも見

られる。粗末な作りながら紛れもなく碑と呼ばれるものだった。私にそれと分かるはずもなかったが、何か惹きつけられるものがあつたので、後から上がつてきた母に聞いてみた。

「これは何なの？」

「昔、ここで女の人が死んだのよ」

母は、少し言いよどむようにしていたあと、答えた。

「お墓？」

私が尋ね返すと母はもう先を歩いていった。私はしばらく眺めていたが、無人の島に昔の女の人の墓があるのが奇異な感じがして、ぼつんとただ一つ立っていた石柱のことは、いつまでも私の記憶に残った。

私とその石柱……碑のいわれを知つたのは、それから20年が過ぎた昭和30年のことである。当時、第三管区の設標船「ほくと」の乗組員だった私は、神子元島灯台に勤務していた経験をもつ本部灯台部（当時）の職員から、島の灯台員たちに語り継がれてきた碑にまつわる悲話を聞かされたのだった。

江戸時代のことである。伊勢桑名の船乗り与市がお澄という娘と恋仲になったが、お澄の親の反対で結婚できない。そこで江戸へ出て2人で暮らすことに決め、与市が乗っている江戸廻船にお澄を乗せて連れ出すこ

とにした。だが、廻船は伊豆下田湊で幕府船番所の船改めを受けなければならない。手形のない女を乗せていれば処罰される。お澄を神子元島に降ろし、下田での船改め後に島へ戻って江戸へ向かうことにした。

しかし、下田に入港すると天気が悪化し、船改めが済んでも出港できない日が続いた。神子元島での時化の恐ろしさは、昭和の初めに灯台長を勤めた人が「暴風の時には波は岸壁を上がって灯台と向かい合つて立っている信号柱の天辺を越す40メートル以上の飛沫である。（略）それは波が襲うのではなく海がのしかかってくるのである」と臨場感豊かに書き残されている。そんな凄まじい自然の中で、食料や水も十分でない、か弱い娘がいかに過ごしたのだろうか。

ようやく5日後に島を訪れた与市が見たのは、下田を望みながら息絶えているお澄の姿だった。涙ながらにお澄のなきがらを抱いた与市は、黒潮の海に身を投げて行方を絶った。後になって、神子元島付近で下田の船の難破船が続いたので、お澄が呼んでいるのだと考えた下田の人たちが、島に小さな石碑を立ててお澄の霊を弔つたのである。

私が島でみた石柱こそ、その石碑だったのだ。神子元島の灯台員たちが、与市とお澄の話をどのようにし

て知ったかは定かではない。しかしながら、家族を下田に置いて孤独と窮乏に耐えながら沖行く船に灯を点し続けた男たちが、愛と悲しみに満ちたこの話を語り継いできたのは、当然なのかもしれない。(この悲話の項では、私の記憶が不確かな部分を『燈台風土記』燈光会刊により補筆した)

私が乗船中の設標船「ほくと」は、灯浮標の多い伊勢湾を持つ第四管区へ年に3回は回航した。その往復には必ず神子元島の北側の水道を航行する。その都度、懐かしさと物悲しさとが入り混ざった思いで島と灯台に見入ったものである。

そして、私の船乗りとして最後の航海当直が、神子元島沖を航過するものだった。昭和32年度の第二次補給航海を終えて、門司から東京へ帰港中の灯台補給船「若草」でのことである。「これが見納めだ」、こみ上げてくる思いで見た白黒横縞の灯塔の姿は、今も心の中に住み付いている。

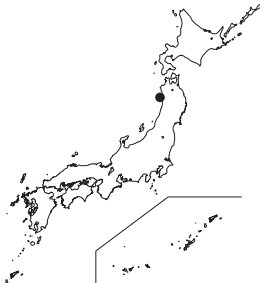
(終)

＝訂正とお詫び＝

2024(令和6年)灯台カレンダー、2月尻屋埼灯台位置図に誤りがありました。

お詫びして訂正いたします。

(誤)



(正)



小4の灯台博士による灯台ペーパークラフト展覧会

燈光会事務局

8月のある日、事務局に一通の封書が届きました。開けてみると、中にはチラシと短いコメントが添えられていました。

チラシの内容は、「灯台ペーパークラフト展覧会、9月2日(土)、3日(日)、品川区で開催」とあります。【写真-1】

記憶を遡ると、3か月前の今年5月、「燈光会のホームページに掲載されている灯台ペーパークラフトを作って展覧会をやってもいいですか?」といったメール

ルでの問い合わせがあり、二つ返事で承諾したところ、チラシができたなら送りますと回答があったことを思い出しました。

このチラシはその時の約束だったのです。

送ってくれたのは、展覧会の主催者でもある東京都品川区在住の小学4年生の小林慧大くんこばやしけいたです。【写真-2】

これは見に行くしかないでしょ!とカレンダーに印をつけ、展覧会の初日、会場へと向かいました。



【写真-1】
灯台ペーパークラフト展覧会のチラシ(チラシ自体がペーパークラフトになっている)



【写真-2】
灯台ペーパークラフト展覧会を主催した「灯台博士」小林慧大くん(小4)

会場のコミュニケーション
ニティー施設は、ガラス張になっていて、外からも中の様子が伺えます。最初、外から見た時は、床に無造

作に灯台のペーパークラフトが置かれて見えて、まだ準備中かなと思いましたが、ドアを開けると、そこに広がる想定外の光景に絶句してしまいました。

作品は、床に無造作に置かれているのではなく、部屋いっぱいには広げられた日本地図の上に実際に灯台のある場所に置かれています。日本地図も慧大くんが部屋の大きさを考えながら、紙を貼り合わせ、実際の地図を参考にしながら、頭の中のイメージと合わせて切り抜いたものだそうです。

日本のどこに、どんな灯台があるのか、俯瞰して見えるように配置されているのです。【写真―3】

慧大くんが灯台に目覚めたのは、以前福岡県に住んでいた時に、角島灯台に行ったことがきっかけで、以来、灯台ペーパークラフトの製作に挑戦し、これまでに約150基の灯台を作ったとのこと



【写真―3】
部屋いっぱいの日本地図の上に配置された作品

す。

慧大くんとはばらく灯台談義をしましたが、生半かな知識ではなく、こちらが教えてもらう場面もあり、学校では「灯台博士」と呼ばれ、お友達だけでなく、先生からも一目置かれているそうです。

話を進めるうちに、慧大くんと会うのは、今回が初めてではないことが分かりました。実は慧大くん、昨年の11月に御前崎市で開催された灯台ワールドサミットに来ていて、シンポジウムの中で、スクリーンに映し出された灯台の名前をすべて言い当てて会場を沸かせた「スーパードラゴン少年」だったのです。確か燈光会のブースにも来てくれましたね。

なかなかお話が尽きないところで、最後に将来の夢を聞かせてもらいました。

将来の夢は、灯台に泊まれるようにホテルにして、そこにレストランを併設し、そのレストランのオーナーシェフになることだそうです。さらに鉄道も引き込みたいと語ってくれました。

とても具体的で素敵な夢ですね。きっと実現できると思います。

いつか慧大くんの経営する灯台ホテルに泊まることを夢見つつ、今後の活躍に期待したいと思います。

70
Return to
Japan.

奄美群島日本復帰
70周年



撮影：鹿児島航空基地

笠利埼灯台特別ツアー 夏休み小学生自由研究応援企画

8月20日（日）、奄美海上保安部は奄美大島最北端の笠利埼灯台で一般公開・特別ツアーを実施しました。

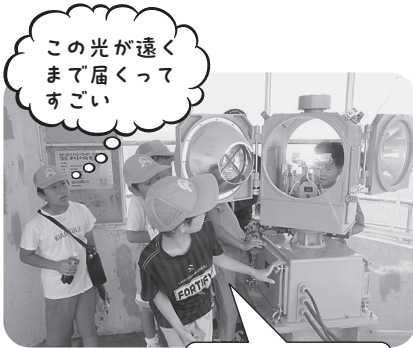
暑中での開催に参加者が集まるか不安でしたが、夏休みの想い出に是非灯台に入ってみたいという親子や児童ク

としまご
南北西
なんぼく

十
管
区

ラブが続々と訪れ、職員が同行して灯台案内、役割、仕組み、歴史を説明する特別ツアーも、予定の10人を大きく上回る27人、保護者や一般客を合わせると64名が来場しました。

公開終盤には、鹿児島航空基地航空機のしよう戒に併せたローパスもあり、大きな歓声もあがり大盛況に終わりました。ご協力頂いた皆様に対し、この紙面をお借りして御礼申し上げます。
(奄美海上保安部)



この光が遠くまで届くってすごい

灯台かっこいい！



灯台って色々な役割があるんだね。

灯台について説明



歩くだけでも大変！

ツアー客御一行様

飛行機も羽を振ってる!!



航空機ローパス



制服試着

第17弾

のほねる灯台(16基) スタンプラリー達成者



全国北から南までの16灯台巡っていただき、誠にありがとうございました。
達成者の皆様、おめでとうございます！

第133号

古籟 帆乃佳(豆柴)様(1.5歳)
(ご主人：克彦様)愛知県春日井市在住

- ☆ スタンプラリー開始年月日
令和3年12月18日 初島灯台
- ☆ スタンプラリー達成年月日
令和4年12月24日 残波岬灯台
- ☆ スタンプラリーを始めたきっかけ
1回完了し、愛犬と旅行しながら改めて巡ろうと思っただけ。(前回45号達成)
- ☆ 16か所巡った感想



感無量です。ワンちゃんと一緒に目的地到達は大変だったが、きれいな景観に巡り合せて各地に来てよかったと思った。

第134号

班目 哲司様(65歳)東京都世田谷区在住

- ☆ スタンプラリー開始年月日 令和3年3月20日 出雲日御碕灯台
- ☆ スタンプラリー達成年月日 令和5年1月2日 犬吠埼灯台
- ☆ スタンプラリーを始めたきっかけ 灯台への関心／感謝
- ☆ 16か所巡った感想 コロナに負けるな。

第135号

さっと様(45歳)千葉県野田市在住

- ☆ スタンプラリー開始年月日 令和3年10月3日 犬吠埼灯台
- ☆ スタンプラリー達成年月日 令和5年1月3日 都井岬灯台
- ☆ スタンプラリーを始めたきっかけ 全国の灯台を回りたいから。
- ☆ 16か所巡った感想 宮古島へ行けて貴重な機会になりました。

第136号
(同着)

岩瀬 弘大 様 北海道在住

- ☆ スタンプラリー開始年月日 令和4年1月7日 残波岬灯台
- ☆ スタンプラリー達成年月日 令和5年1月7日 平安名埼灯台

第136号
(同着)

るん 様 千葉県在住

- ☆ スタンプラリー開始年月日 令和4年1月8日 残波岬灯台
- ☆ スタンプラリー達成年月日 令和5年1月7日 平安名埼灯台

第138号

M.F 様(46歳)東京都在住

- ☆ スタンプラリー開始年月日 令和4年2月26日 野島埼灯台
- ☆ スタンプラリー達成年月日 令和5年1月19日 都井岬灯台
- ☆ スタンプラリーを始めたきっかけ
関東最南端の野島埼を訪れた時に偶然入った野島埼灯台でスタンプラリーがあることを知って始めました。
- ☆ 16か所巡った感想
スタンプラリーを行っていないければ、おそらく行かなかったであろう場所を訪れることができ良かったです。

第139号

T.Y. 様(31歳)京都府京都市在住

- ☆ スタンプラリー開始年月日
令和2年9月10日 角島灯台
- ☆ スタンプラリー達成年月日
令和5年2月9日 潮岬灯台
- ☆ スタンプラリーを始めたきっかけ
各地の灯台を訪れたいと思ったから。
- ☆ 16か所巡った感想
参観灯台以外にもいろいろ訪れたいです。



第140号

三木 隆行 様(50代)東京都練馬区在住

- ☆ スタンプラリー開始年月日
令和1年9月20日 都井岬灯台
- ☆ スタンプラリー達成年月日
令和5年2月9日 平安名埼灯台
- ☆ スタンプラリーを始めたきっかけ
スタンプ帳を買ったため。
- ☆ 16か所巡った感想
長かったです。



第141号

今村 敦隆 様(60代)神奈川県横浜市在住

- ☆ スタンプラリー開始年月日
平成31年3月6日 野島埼灯台
- ☆ スタンプラリー達成年月日
令和5年2月12日 残波岬灯台
- ☆ スタンプラリーを始めたきっかけ
元外国航路貨物船船長、現在東京湾水先区水先人、若い頃からお世話になった灯台めぐりを思い立った。
- ☆ 16か所巡った感想
残波岬灯台と平安名埼の訪問が大変だった。コロナ対策で1回休み。



第142号

名古屋のホシノさん(45歳)愛知県名古屋市在住

- ☆ スタンプラリー開始年月日 令和1年6月15日 犬吠埼灯台
- ☆ スタンプラリー達成年月日 令和5年2月19日 平安名埼灯台
- ☆ スタンプラリーを始めたきっかけ スタンプ集めがすきだから。
- ☆ 16か所巡った感想 夜は、ライトアップしていると写真を撮りたい。

のぼれる灯台 2024

のぼれる灯台 2024



出雲日御碕灯台 (鳥根県出雲市)

販売価格 600円 (税込) (送料・振込手数料 実費)

★会員の方には1部贈呈致します

出雲日御碕灯台
(鳥根県出雲市)



大伏崎灯台 (千葉県銚子市)



尻屋崎灯台 (青森県下北郡東通村)



入道崎灯台 (秋田県男鹿市)
塩屋崎灯台 (福岡県いわき市)



初島灯台 (静岡県熱海市)



都井岬灯台 (宮崎県串間市)



野島崎灯台 (千葉県南房総市)
安乗崎灯台 (千葉県志摩市)



大王崎灯台 (三重県志摩市)



潮坪灯台 (和歌山県東牟婁郡串本町)



観音崎灯台 (神奈川県横須賀市)



角島灯台 (山口県下関市)



御前崎灯台 (静岡県御前崎市)



御前崎灯台 (静岡県御前崎市)
平安崎灯台 (沖縄県宮古島市)

申込先

公益社団法人 燈光会

〒105-0003 東京都港区西新橋1丁目14番9号 西新橋ビル3F
TEL (03) 3501-1054 FAX (03) 3507-0727
Eメール: info@tokokai.org

昭和三十一年十一月二十五日発行(隔月一回五日発行) 三種郵便物認可

「燈光」

十一月号 第六十八巻 第六号